
魔法少女リリカルなのはA's 嵐に挑む翼

GL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA・S 嵐に挑む翼

【Nコード】

N6925I

【作者名】

GL

【あらすじ】

「ハッピーエンド、届けます。」

力を手にした青年が目指すのは、英雄ではなく郵便屋さん。

渡り歩くは王国ではなく次元世界。

その翼は嵐を跳ね返すことができるのか？

リリカルなのはA・Sにオリジナルキャラを加えた再構成物。と、
いうか螺旋の蛇でリリカルな物語を回そうとしたらなぜかこうなっ
た。

でも後悔はしていない。

プロローグ「出会いの落とし穴」(前書き)

タイトルにリリカルなのはとありますが、このプロローグではオリジナル設定の断片的な紹介のみです。よってなのはやフェイトはまったく出てきません。あしからず。

プロローグ「出会いの落とし穴」

その戦場には絶望しかなかった。いや、この表現では不公平であろう。こちらの絶望は敵にとっては喜ばしい希望の光であるのだから。その希望と絶望は敵の従える黒龍がもたらしていた。こちらの軍勢では対処できそうにない。それはこちらの敗北と同義である。そう、その戦場はこちらにとって絶望以外の何者でもなかったのだ。ただし、戦場のみを見ればの話である。事実、こちらはその状況から勝利している。簡単な話だ。火力を連続トップデッキして本体を焼き切っただけである。こちらにとっては幸運、敵にとってはこんなはずじゃなかったこと。質を別にすればカードゲームでもたびたび起こることなのだ。そのたびたび起こることが自分に起きたからといってそのたびに嘆いていたのではキリがない。

トップデッキで制した熱い決闘 - 実際には学校の先輩とカードゲームで遊んでいた - の帰り道、信号待ちのとき、それは唐突にやってきた。

『あなたは選ばれた人間よ。世界を救ってみるつもりはない？』

青年は電波な台詞を耳にした。女性の声だ。あたりを見回しても周りには人どころか猫すらいない。

「ネジでもゆるんだか、我が愛車よ」

青年はとりあえず自分の乗っている自転車に話しかけてみた。

『あなたの左の胸ポケットよ。』

言われてみればその声は左胸のポケットから聞こえていた。しかし、今、自分の左胸ポケットには自宅の鍵しか入っていないはずだ。もちろん、自宅の鍵にこんな電波な内容をしゃべる機能はない。

「一週間様子見てまだ聞こえるようなら精神科に行くか。」

誰ともなくつぶやいて、信号に視線を向ける。しかし、信号はみつからなかった。代わりに一羽のカラスがいた。正確には体長が2

mを超える黒い鳥のような生き物、であるが。

『あれ、何とかしないとあなた死ぬんじゃないかしら。』

また左胸ポケットから声が聞こえてくる。たぶん「あれ」というのは目の前のカラスのことだろ。

「あれ、武器も何もなしにどうにかできるものなのか？」

ほとんど条件反射で問いかけていた。何かしてないと発狂するのは確実だ。それぐらい目の前のカラスには威圧感があつた。こんなとき幻聴でも話相手がいることを感謝した。

『あなたと私なら可能性はあるわね。もつとも、その代償として非常識な非日常での生活があなたを待つてるけどね。』

「やらなきゃやらないでここで俺の人生終了、という理解でオーケー？」

『話が早くて助かるわ。協議している時間も多くないし。』

「なら、ひとつだけ。」

『どうぞ。』

「非常識な非日常って面白いかな？」

『人それぞれよ。ただ、退屈はしれないと思うけどね。』

青年はきつかり一秒間、考えるそぶりをみせた。その後覚悟の決まった、否、前向きに諦めたような表情でこう告げた。

「なら非常識な非日常とやら体験してみますか。どうすればいい？」

『それなら、まず私をポケットの外に出してくれないかしら？いい加減窮屈なのだけれど。』

左胸ポケットを探ると確かに自分のものではない、日本刀を模したキーホルダーが出てきた。鞘と鐔は黒、柄は白だ。いつの間に入っていたのやら。

「それから？」

『我等に翔け得ぬ空は無く、我等に駆け得ぬ大地も無い。装甲。』

キーホルダーがそう告げた瞬間、青年は戦国の武者のような甲冑を身にまとっていた。ただ、その甲冑は銀を基調にところどころ赤と青のラインが入っているため、どこか西洋らしさがあった。そし

て、何より、その甲冑が御堂のイメージするものと違っていたのは、航空機のターボジェットエンジンに似たようなものと、翼そのものと思われる金属製の板を背負っていたことだろう。ただし、航空戦ができそうにも関わらず、ミサイルなどの飛び道具は見当たらず、それこそ戦国時代よろしく、腰に下げているキーホルダーをそのまま大きくしたような日本刀が主兵装のようだった。

『赤と青、ね。また珍しい人間が仕手してになったわね。』

『いやいやいや、できれば説明…。』

青年はこの姿や女性の声が自分の頭に直接響いてくることなどの説明を求めようとしたが、途中で説明を求める必要の無いことに気づいた。なぜなら、聞かずとも頭の中に情報が流れ込んでいた。

『今のあなたの熱量では装甲戦闘は三十秒が限度。話してる余裕は無いわ。』

確かにこの間にも自分の体温が奪われているのがわかる。

『余裕はない、か。』

そう呟くと大ガラスに向かって一気に駆けた。狙いは首への抜刀術。生身では現実逃避するしか無かったガラスの威圧感もこの甲冑否、劔冑つるぎの力を感じている今ではそんなものあってないようなものだった。

射程内、一閃。手応え…、無し。

『上…』

頭に直接響いてくる声に従い、視線を向けると、なるほど。巨体に似合わぬ俊敏性でガラスは上空に離脱していた。

即座に追撃のため合当理がったり 背中に背負っているターボジェットエンジンもどきのことだ を噴かす。しかし、ここでミスった。噴かし過ぎたのだ。あつという間に大ガラスを通り過ぎ、遙か上空へ。攻撃のタイミングを逃してしまった。さらに合当理を噴かしてから体温の奪われ方が酷い。正直あと一撃が限界だ。

『空中戦の経験は？』

『あるわけがない。』

平凡な学生にそんな経験あるわけがない。

『諒解、こちらでフォロースするから見た目そのままです。突っ込んで一撃で決めるにはそれしかないわ。』

「え？敵の未来位置に向かって突っ込むんじゃないのか？」

当然、敵も移動しているのだ。今いる場所に突っ込んで空振りになる。空中戦の経験がなくともそれくらいはわかる。

『その未来位置があなたじゃ読めないでしょ。だからごちゃごちゃいわずに全力で突っ込んで。』

どうやら何か策があるらしい。ちなみにこっちの体も限界に近い。いわれたとおりに全力で突っ込むしかなさそうだ。

切っ先をカラスに向け、突きの体制で腕を固定。合当理を噴かす。これならタイミングに関係なく当てれるはずだ。交差軌道に乗ってさえいれば。

突撃し始めてから数瞬、そこで気づく。やはり、というかこのままだとカラスの後方を通り過ぎてしまう。指示通りに見たままに突撃してしまったためだ。あわてて軌道修正しようとして、

『進路そのまま。装備イクイップ、稲妻ライトニングのすね当て。』

そのとき、急激な加速を感じた。見る間にカラスとの距離が縮む。そしてカラスの背中から腹にかけてを何の抵抗もなく貫通、気づくと地面に激突寸前にだった。慌てて制動をかける。思いのほか軽く止まったため、無事に着地できた。

『装甲解除』

その言葉とともに、下校時の服装に戻り、

『お疲れ様、とりあえず合格ね。でも、もう少しがんばらないと早死にするわね。』

目の前に浮いているキーホルダーから話しかけられた。

「…、終わったのか？」

『さっきのカラスに関しては運動エネルギーたっぷりの一撃で跡形もなく消滅。でも、あなたの非日常は始まったばかり。』

ようやく一息つけるようだ。ほっとしたところでふと気づいたこ

とがあった。

「そういえば自己紹介がまだだったな。あんたの名前は？」

『そういえばそうね。出会ってから即戦闘になっちゃたからまだ名乗ってなかったわね。私の銘は鳳凰』

「俺の名は……。」

そう名乗ろうとして急に眠気が襲ってきた。そういえばずいぶん体が冷たい。さっきの戦闘で本当に限界まで体温を奪われたようだ。ぶっちゃけもう無理。

こうして名乗ったかどうか怪しいままに意識を手放した。

こうして、少ばかり性格がひねてはいるが概ね平均的な高校2年生、鳳御堂はぼっかり開いていた非日常という名の落とし穴に見事に落ちていった。

プロローグ「出会いの落とし穴」（後書き）

次回からはきちんとなのはキャラが参加予定。ただし初作品のため次回更新がいつになるのかまったく見当が付きません。

第一話「始まりはいつも突然に」(前書き)

ここからはアニメに沿った展開になります。この話はアニメの話と二話に該当します。

第一話「始まりはいつも突然に」

何だろっ、いつもより眩しい。

鳳御堂おおむつどうはそう感じながら目を覚ました。部屋の明かりがつけっぱなしだった。そこで違和感に気づく。天井がやけに高い。自宅ではないらしい。

『おはよう御堂、ようやくお目覚めね。』

日本刀のキーホルダーがふよふよと目の前に浮いている。

「おはよう、鳳凰。あれ？俺きちんと名乗ったか？」

確かちゃんと名乗る前に睡魔に襲われて…。

『まだ寝ぼけてるの？もうかれこれあなたと出会って半年近いのよ。名乗ってもらったに決まってるじゃない。』

半年？そういわれてようやく頭が回りだした。なるほど、ずいぶん懐かしい夢を見ていたらしい。

『御堂、本当に大丈夫？』

「いや、ちよつと夢を見ていただけだ。お前と初めて会ったときの夢を。」

『ああ…、確かにあの時は名乗る前にぶっ倒れたわね、御堂。』

「面目ない。」

御堂は苦笑しながら謝るしかない。

閑話休題こればかりはさき。

『それで今の状況だけど…。』

切り出したのは御堂の劔冑けんむつ「鳳凰」。普段はキーホルダーサイズの日本刀の姿だ。

「それはこちらから説明しよう。」

そう言いながら黒服の男の子が入ってきた。肩からトゲの様な装飾がある。

「僕は時空管理局執務官クロノ・ハラウン。そしてここは本局の医務室だ。君が戦闘の跡地で倒れているところを発見、なのはのつ

いでに保護したというわけだ。」

なるほど、ようやく繋がった。そういえばあの白い少女、確か名前は高町なのはが管理局とか何とか言っていた気がする。つまりここは少なくとも高町なのは側の陣営らしい。

「それで僕としては君の所属と目的、なぜあんな場所で倒れていたかを聞きたいのだが。」

「まあ、助けてくれた恩もあるんで話せることなら喜んで。とりあえず俺の名前は鳳御堂。所属はミレニウム共和国、特殊戦技教導隊。それであそこに倒れていた経緯なんだが……。」

そう答えて、御堂はぶつ倒れることになった経緯を語りだした。

いつだって事が起きるのは突然だ。それは身に沁みている

『御堂、結界の反応を探知。』

このときも鳳凰の報告は突然だった。

「最近噂の魔術師狩りの可能性は？」

『そこまではわからないわよ。なんたってデータが少なすぎる。でも可能性はゼロじゃない。』

最近、魔術師ばかりを狙った事件が起きている。幸い、死者は出ていないものの、魔法工学研究局の学者が何人かがこの被害にあっている。困ったことに犯人の手がかりはゼロに等しい。

「まあ、出るしかないでしょ。もし魔術師狩りなら何らかの手がかりは掴めると思うし。」

『ここを出なければ良くて減給、最悪の場合は銃殺刑までであるでしょうからね。』

鳳凰が怖いことを告げてくる。

「場所は？」

『この反応だと海鳴市の中心部かしら。』

「諒解。それじゃあこっちに配属になってからは初の緊急出撃だ。気合いいれていきますか。」

荒事になっても対応できるように準備を整える。と、言っても鳳

鳳と同サイズの黒と銀のキーホルダーを二つと本を一冊、最後に鳳凰を持ってオーケー。忘れ物はなし

『最初から装甲を？』

「さすがに得体の知れない相手に最初から切り札は切れないよ。」
言いながら鳳凰を掲げる。そして、

「我が欲するのは外道の力。悲しみを否定する^{デウス・エクス・マキナ}ご都合主義。武装開放。」

御堂がそう告げた。すると御堂の周りに異変が起きた。まず最初に足元に広がる光輝く五芒星^{エルダー・サイン} 旧き印。そして本のページが解けていく。それらの大部分が御堂の背中に集まり翼となる。それと同時に残りの部分が腰に集まりホルスターを形作る。

先ほどの黒のキーホルダーは黒地に赤の装飾が入った自動拳銃に、銀のキーホルダーは銀色の回転式拳銃になり、それぞれホルスターへと納まった。

最後に鳳凰は通常サイズの日本刀となった。

御堂は自分の武装が開放状態になっていることを確認すると最後の安全装置を外した。

「銀鍵守護神機関、始動。^{イグニッション}」

この一言で御堂の体を十分にして圧倒的な魔力が循環^{まわ}し始める。
「翔んで行く。シャンタクを。」

『凍てつく荒野より翔び立つ翼を我に シャンタク。』
背中の翼から魔力があふれ出し、御堂の体を空中へと浮かせる。

そしてフレアを吹き上げると海鳴市へ向けて一気に加速した。

結界にたどり着いた御堂は途方に暮れていた。

「これ、どうすりゃいいんだ？」

この結界の術式は御堂が初めて見るものだった。

『私もこの術式は初めてよ。解析して抜け道を見つけないなんてとても無理よ。』

鳳凰もお手上げらしい。

「それなら、力づくで突破するぞ。」

鳳凰を構える。突きの姿勢だ。

『諒解。召還^{サモン}、ボール・ライトニング。』

鳳凰に電光が迸る。

『シャントク、フルパワー。』

結界までを圧倒的な速度で駆ける、翔ける。

「突貫！」

結界をぶち抜くだけでは止まらず、ビルを3つほど貫通し、ようやく止まった。

「ふう。」

御堂は残心、する暇もなくなかなかい魔力を感じる。しかも少なくとも4つはある。その内3つは戦闘中なのだろう、激しく動いているが一つだけ孤立してまったく動いていない。

『戦闘はもう始まっているみたいね。どうするの？』

「もちろん首を突っ込んで話を聞く。その後はそれから考える。」
そう告げると鳳凰を鞘に納め、魔力反応がいかにも関らず一人で孤立している反応へと向かった。

しばらく飛ぶと白い服装の小学生ぐらいの女の子が見えてきた。

「あの魔力反応はあの子か？あの歳でこの魔力はとんでもない才能だな。」

『確かにあの子から感じる魔力は特殊戦技教導隊のレベルね。』

御堂の驚嘆に鳳凰も同意する。

『でも、驚いてばかりいても仕方ないでしょう。とりあえず話を聞きましょう。』

そう促された御堂はその少女の正面に降りた。

いきなり降りてきた御堂に対して少女は驚いていた。しかしすぐに警戒して先端に赤い宝石のついた杖を向ける。見た感じボロボロだがそれでも戦意は衰えていないらしい。そんな少女に対して危害

を加えるつもりがないことをアピールするため両手をあげながら話しかける御堂。

「今すぐにそちらに危害を加えるつもりはない。俺はミレニアム共和国、特殊戦技教導隊の鳳御堂だ。今起きているこの場の状況を聞かせて欲しい。」

少女は警戒しながらも

「ええと…、鳳さんは魔導士みたいですけど管理局の方じゃないんですか？」

そう返答してきた。

「管理局なんて知らん。さっきも行ったとおり所属はミレニアム共和国の特殊戦技教導隊だ。あと、できれば『御堂』と呼んでくれ。そっちのほうが慣れてるんだ。」

『出会っていきなりナンパ？しかも相手は小学生よ。少しは自重しなさい、このロリコン。』

鳳凰が横から茶々を入れてくるがスルーする。したい。させてくれ。

しかし目の前の少女は声の出所が気になるのか視線が腰の鳳凰へとちらちら向いている。

「こいつは鳳凰、俺の劔胄だ。それとロリコン云々は無視してくれとありがたい。」

仕方ないので少女に説明する。

「にはははは、そうします、御堂さん。」

どうやら純真な娘らしい。助かった。

「ところで御堂さん、ミレニアムってあのアラビア海の産油国ですよね？」

少女が聞いてくる。

「確かにその通りだが…。」

「じゃあ、御堂さんはそのミレニアムの魔導士組織の一員なんですか？」

「そんなもんだ。ただ、一般の人間には知らされてないけどな。」

『ちよつと、御堂。今の状況をこの娘に聞くんではよ。いつまでもこつちのことばかり話してないでさつさ聞きなさい。』

「おつと、いかん。ええと…。」

「なのはです。高町なのは。」

「それじゃあ、高町さん。なんでこんな状況になったのか教えてくれ。」

「それが、私もいきなり襲われて何がなんだか…。やられそうになつたところにフェイトちゃん達が助けに来てくれて…。」

「そうなると次は襲撃者側に話を聞きに行くか。情報ありがとう。余裕があれば高町さんを助けにきたその友達を援護するよ。」

「そう告げると御堂はシャンタクを噴かして戦闘のご真ん中へ突っ込んでいった。」

『御堂、さつきの女の子の話どう思う？』

「全部本当だろうな。それに管理局とか何とか言つてただろ？おそらく高町さんとお仲間さんにはそこそこの規模の組織がついてる。うまくいけばそこから情報がもらえる。助けておいて損はなし。」

「そう言いながらも御堂は3組の戦闘状況を伺いながら割つて入るタイミングを計っている。」

「そして金と紫の光がいったん離れた。」

「行くぞ。」

『諒解。』

御堂は右手に黒い自動拳銃 獅炎しえん を、左手に銀の回転式拳銃 竜氷りゅうひょう を構え、二人の間に割つて入った。

「ちよつと失礼。」

獅炎で斧を、竜氷で剣を受け止めながら二人に話しかけるが、

「おおおおお！」

その声とともに左にかかってくる力が強まってくる。剣を振るっているポニーテールの女性はどうやら聞く耳を持っていないようだ。

そしてその女性は剣を振りぬいた。

少々無理な体勢で止めに入った御堂は踏ん張れずに斧の使い手、ツインテールの少女とともに吹き飛び仲良くビルにたたきつけられた。

「痛たたた。」

御堂はこうつぶやくが固有スキルの魔力放出で身体強化を行っていたため大したダメージは負っていない。

『結構やるわね、あの剣士。どうする御堂、装甲する？』

「いや、管理局の正体も見極めてない。だから装甲はなし。ただ、今の状態じゃきついのも確かだ。銀権守護神機関をエクテンに上げる。」

『諒解。』

「銀権守護神機関、リミット開放。フォーマット、エクステンデッド。」

その言葉とともに御堂の足元に展開する旧き印。更なる魔力が御堂の体を巡る。

「さて、…。」

行こうか。そう呟き剣士に向けて飛び立とうとしたとき声をかけられた。

「あの、すいません。あなたは一体…。」

声の主は先ほど一緒に飛ばされたツインテールの少女だった。

「ん、俺は鳳御堂。所属はミレニアム共和国、特殊戦技教導隊。」

「え？管理局じゃない？」

「さつき話を聞かせてくれた高町さんも同じ事を聞いてきたんだが、その辺の説明はまた余裕のあるときにしてくれ。それよりも今の状況を聞きたいんだが。教えてくれるかい？」

「高町さん？ああ。なのはのことですよ。私たちはなのはを助けに来たんです。そしたらすでに戦闘になってて。」

「つまり、これ以上はあちらさんに聞くより他はない、と。ありがとう。讓ちゃん、手の怪我が酷いだろ。ここから先は任せてくれ。」

手負いの少女に御堂はそう告げて先ほど自身を吹き飛ばした剣士へと向かってゆく。

そして御堂は剣士と対峙すると、こう声を張り上げた。

「こちらはミレニアム共和国、特殊戦技教導隊、鳳御堂。この戦闘を仕掛けたのはそちらだと聞いている。理由を聞かせてもらいたい。」

「そちらが名乗ったのだからこちらもなのならければ礼儀に反するな。ヴォルケンリッターが将、シグナム。我が剣は主のために。」

そう言いシグナムと名乗った剣士は翔けてくる。

それに対して御堂は二丁の拳銃を発砲しながら後ろに下がり、問いかける。

「最近、魔術師ばかりを狙った襲撃事件がこの近辺で起きている。

その手がかりを持っていくなら教えてくれ。それなりの対価は支払う。」

「騎士が武器を持ち戦場に立ったのだ。ならば後は剣を打ち合うのみ。聞きたいことがあるのならば力づくで来い。」

その時点では御堂はシグナムの間合いの外。しかし連射に次ぐ連射により獅炎、竜氷ともに再装填が必要な状況になっている。そしてシグナムがそんな隙を見逃す訳がない。

一気に踏み込み、自らの愛剣「レバンティン」を振り上げる。

御堂はスピードローダーを用いて竜氷の弾倉に叩き込み、獅炎のグリップにマガジンを填める。再装填に要した時間はほんのわずかに過ぎなかった。

だが、御堂が構えたときはすでに両者の間合いは銃から剣へと移っていた。

そして振り下ろされるレバンティン。御堂が発砲するよりもレバンティンが御堂を両断するほうが早い。

しかし、それは初撃と同様に左手の回転式拳銃、竜氷によって受け止められていた。

ただし初撃と同様なのはここまでだった。

「上等だ。なら、望みどおりに力づくで聞き出してやる。獅炎。」
御堂はシグナムのレバンティンを片手で止めながら、もう片方、
右手の自動拳銃、獅炎をシグナムに向ける。

「くっ。」
シグナムはうめきながら即座に回避機動をとりながら障壁を展開
する。

その瞬間に御堂は発砲。獅炎が吼える。

そして着弾。放たれた弾丸はシグナムの障壁を貫き騎士甲冑に到
達する。しかし、シグナムの回避機動が功を奏し弾丸の進入角度が
浅くなっていたため弾かれる。だが、もう少し角度が深ければ確実に
騎士甲冑を貫通していた弾丸は弾かれながらもシグナムの体勢を
ほんの僅か、崩すことに成功する。

そして御堂にはそれで十分だった。御堂はさらに踏み込む。すで
に間合いはゼロ距離。シグナムの刃、さらにその内側の領域。

「吼える、竜氷。」

竜氷の銃口を甲冑にあてがい回転式拳銃の利点を生かして装弾数
六発を一瞬で打ち切る。

「なっ。」

一瞬で懐にもぐりこまれたシグナムは回避、防御ともにできずに
ほぼ同一箇所と同じタイミングで六発の弾丸を叩き込まれて墜ちて
いく。

だが、御堂の攻撃は終わらない。墜ちるシグナムに獅炎を向ける。
「猛れ、獅炎。」

御堂は発砲した。

あの崩れた体勢からでは防御も回避も間に合わないはずだった。
だが、

「レバンティン、カートリッジロード。」

シグナムの声にレバンティンが答え、カートリッジをロード。シ
グナムの魔力が一気に膨れ上がる。

「うおおおおおー！」

裂帛の気合とともにたたき切られる弾丸。だが、その代償にシグナムは剣を振りぬいた直後の無防備な状態を晒す。

キャスト ライトニング・ボルト
『詠唱、稲妻。』

もちろんその決定機を逃す御堂ではない。

雷光をまとった鳳凰を振りかぶりシグナムへと振り下ろした。

直撃。

必殺の一撃はシグナムを地面にたたきつける。

「チエックメイトだ。」

そう告げてシグナムに鳳凰を突きつける。

「では話してもらおうぞ。」

しかし、御堂が話を聞くことはできなかった。

側面からの殺気に気づき即座に離脱。

刹那の間において鉄槌が御堂のいた場所を通過する。

「大丈夫か、シグナム。」

「ヴィータか、すまん助かった。」

鉄槌を振るうのは赤い髪を三つ編みにした少女だ。どうやらヴィ

ータという名前らしい。

シグナムとの会話からして彼女も襲撃者側のようだ。

「なんだ、テメエ管理局の人間か？」

ヴィータが御堂にハンマーを向けて問いかけてくる。

『この質問は今日だけで3回目ね、御堂。』

「そして俺が名乗るのは4回目だ。」

御堂はヴィータに向けて本日4回目となる自己紹介をした。

「俺の名は鳳御堂。所属はミレニアム共和国、特殊戦技教導隊。

お前らの話が聞きたいだけだ。いきなり戦闘するつもりはない。」

それと同時に目的が対話であることを伝えるが、

「ごちゃごちゃうるせえ、邪魔するなら叩き潰す。」

どうやら伝わらなかったらしく、ハンマーを振りかぶって突撃し

てくる。

「ちっ、やっぱりこうなるか。」

御堂は舌打ちをすると鳳凰を振りかぶり、ヴィータに向けて投げる。

「なっ。」

ヴィータは不意を衝かれるが即座に回避。鳳凰はヴィータにダメージを与えることなく地面に突き刺さる。

だがその行動は御堂の予測通りだった。二丁拳銃を手にヴィータに突撃する。

「ベルカの騎士に接近戦を挑むとはいい度胸じゃねえか。」

御堂の意図に気づいたヴィータは接近戦に備えて鉄槌を構える。

しかし、不意を衝かれたヴィータと予測していた御堂。両者の差は明確だった。

ヴィータが体勢を整える前に左手の竜氷を鉄槌に叩き込み、崩す。そこへ右手の獅炎を突きつける。

「猛れ、獅炎。」

発砲。二丁拳銃ならではの連続攻撃。しかし、ヴィータは鉄槌の柄の部分で弾丸の軌道を逸らす。

こうなると無防備な状態を晒しているのは御堂のほうである。

「叩き潰せ、グラーファイゼン。」

横なぎに振られるグラーファイゼン。それを御堂は左の竜氷で受けるが、

「ぐっ。」

圧力に負けて竜氷が手から弾き飛ばされる。

そのままの勢いでヴィータは一回転。同様の軌道で追撃してくる。どう考えても直撃コースだ。だが、

『キャスト 詠唱、ブーメラン。』

ひとりで戻ってくる鳳凰。それは御堂の左手に握られ迫り来るアイゼンを迎撃する。

『今回の受け止め方は合格よ、御堂。』

「そりゃどうも。」

鳳凰の軽口にしっかり受け答えする御堂だが、状況はかなりまず

い。鳳凰の峰に右手の獅炎を沿えることのでかるうじてアイゼンを受け止めている。

(このままじゃまずい。)

御堂はそう考えて、吹き飛ばされる振りをして離脱しようとした。そのときだった。

後ろから殺気が沸く。

「御堂！」

鳳凰が警告するがどうしようもない。

「後ろからの不意打ちは騎士のすることではないが、主のためには騎士の誇りすら捨てるか決めたのだ。」

シグナムだった。

「紫電一閃。」

両手が塞がっている御堂はどうすることもできない。そのまま直撃を受けて意識を手放した。

「と、俺のわかるのはその範囲だが、こんなもんでいいか？」

もちろんありのまま話した訳ではない。御堂は自分のスキルなどに関してほかしてある。

「大体の状況はなのはやフェイトから聞いていたからな。その後の展開について補足すると、君が倒れた後になのはの砲撃魔法によって結界を破壊。君たちを回収した。残念ながら襲撃者たちは取り逃がしたがな。それと君のこれからなんだが…。」

「できれば早くもとの場所に帰して欲しい、というのが本音だ。上司への連絡やら今後の対応についての協議やらやらなきゃならんことが山ほどある。」

御堂の要求にクロノは頷く。

「もう少し、いろいろな事情を聞かせてもらえれば明日中には地球に戻ることは約束する。ただ、戻ってもしばらくは魔法は使えないからそのつもりで。」

クロノの言葉に御堂は絶句。だが、少し意識を集中するとなるほ

ど、確かに魔力がほとんど底を尽いている。これでは銀権守護神機関を開けるまで回復するのに最短でも4日はかかりそうだ。

「まあ、闇の書にリンカーコア、魔力の源を蒐集されたんだ。万全の状態まで2週間はかかるだろう。今日はもうこちらから用はない。事情聴取とかは明日の予定だから今日はゆっくと休んでくれ。それと、この部屋にはロックをかけておくから何か用があれば内線で呼んでくれ。」

クロノはそう告げると部屋から出て行った。

「鳳凰。」

クロノが立ち去った後、盗聴器の類がないことを確認した御堂は鳳凰に話しかけた。

『なに？御堂。』

「あの襲撃者達だが…。」

『魔術師狩りの下手人で間違いないでしょうね。あなたの今の状態がまさにそうなもの。』

「やっぱりか、最初の狙いは高町さんか。」

『そうでしょうね、ちなみに彼女もリンカーコア、だったかしら。』

それを蒐集されたそうよ。』

「鳳凰、なぜ知ってるんだ？」

御堂が怪訝な様子で問いかける。

『もう一人いた少女、斧を持ってた娘。確かフェイト・テストロツサ、そんな名前だったかしら。彼女があなたの様子を見に来てくれたのよ。そのときに聞いたのよ。』

「俺の寝てる間に？そしたらその子は無事だったのか？」

『腕に怪我をしてたけど蒐集されてないぶん、あなたや高町さんよりも軽症ね。』

「それは何より。ところでそろそろ寝ないか？明日は事情聴取とかあるんだろ。」

『そうね、おやすみなさい、御堂。』

「おやすみ、鳳凰。」

御堂は部屋の電気を消し、眠りについた。

第一話「始まりはいつも突然に」(後書き)

次回は日常編。ほのぼののできるかはわかりません。

第二話「筋肉痛と日常の風景」(前書き)

アニメの3話にあたります。よって今回は戦闘はなし。完全に日常編です。

第二話「筋肉痛と日常の風景」

御堂が目を覚ますと見知らぬ天井だった。

(そういえば撃墜されて、管理局とかいう組織に保護されたんだ。)
寝ぼけている頭が徐々に覚醒していく。

(さっさと起きますか。)

目が覚めているのにベッドの中でごろごろしているのは時間の無駄だ。

御堂は体を起こそうとして体の異変に気づいた。

(体がうごかねえ。)

正確には動くのだが、動かそうとすると激痛が走る。

この痛み、一般には筋肉痛と呼ばれるものであった。

「鳳凰、起きてるか？」

「おはよう、御堂。ところで起きてるなら、さっさと内線かけて執務官を呼んだら？この部屋ロックされて中からは開かないわよ。」

「そうしたいのはヤマヤマなんだが、体が痛くて動かせない。」

「それは当然よ。昨夜の戦闘でかなり体を酷使したじゃない。筋肉痛よ。」

「筋肉痛？今まであれぐらいの戦闘はいくらかやったけど筋肉痛になっただことなんてなかったぞ。」

そう、御堂は鳳凰と出会ってからの半年間、生き残るために訓練訓練時々実戦ぐらいで鍛えていたのだが、

「だって、今の御堂は魔力が枯渇してるでしょう。そのせいでいつもなら寝てる間に治る筋肉痛が続いてるだけよ。」

納得。だが問題が解決したわけではない。

「でも、これじゃ身動きが…」

そこで鳴り響く備え付けの電話。

「さっさと出なさい、御堂。」

鳳凰はあくまでも御堂に取らすつもりだ。もっともキーホルダー

の状態である鳳凰が電話に出れるはずもない。

「あががが。」

仕方がないので痛みをこらえつつ（実際にはこらえきれずに奇妙な悲鳴が上がっている）、電話に出る。

『クロノだ。もう昼前なんだからいい加減に起きて来い。』

言われて御堂は時計を見ると確かに11時を回っている。筋肉痛で動けずにボーっとしていた時間を差し引いてもかなりなていたことになる。

「起きて来いも何も部屋にロックがかかっているだろうが。」

『フェイトが何度か起こしに行ったはずだが。』

マジ？と鳳凰に目で問いかけるが、

『私も寝てたから。』

主人ともども寝ぼすけな剣冑だ。

「それはすまん。」

御堂は素直に謝罪する。

『とりあえずもう起きているんだな？』

「それは問題なく。」

『それじゃあ、あと10分ぐらいでフェイトを向かわせるからそれまでに着替えておいてくれ。着替えの位置は……。』

「サイドテーブルにあるのを昨日のうちに確認した。それでいいのか？」

昨日、盗聴器の確認の時に部屋の中は一通り調べてある。

『ああ、それに着替えておいてくれ。それじゃ、あとはフェイトに聞いてくれ。』

それで電話が切れた。

だが、御堂はここで自分の状態を思い返す。筋肉痛で体が起こせない。ましてや着替えるなんて絶対に無理だ。だが、着替えないわけにもいかない。これから女の子がこの部屋に来るのだ。いくらなんでも検査着ではいけない。

御堂は気合を入れて起き上がる。

「うぎゃあ。」

もちろん奇妙な悲鳴を上げながらである。

その後も御堂は「うきよお」とか「あぎゃあ」だのと悲鳴を上げながら着替える。しかし、痛みのため着替えは遅々として進まない。

「鳳さん、フェイトです。入って大丈夫ですか？」

もう10分たっただらしい。御堂は着替えの真っ最中。そのため

「もうちょっと待っ、うが。」

着替えながら返事をしたものだから、悲鳴があがってしまう。もちろんそれは外のフェイトに筒抜けだ。

「お、鳳さん、大丈夫ですか。」

心配してフェイトが駆け込んでくる。御堂は気合で痛みをねじ伏せ、懸命に着替えを急ぐが間に合わない。

フェイトが部屋に入ってみたものは着替え真っ最中の鳳御堂だった。不幸中の幸いは下半身の着替えが済んでいたことだろうか。

「はい、御堂さん。バンザイ。」

ベッドに座りフェイトに手をとられてバンザイの状態で固定される御堂の腕。自分で上げるより肉体的な痛みはましたが、心の痛みは頂点だったりする。

フェイトに着替えを目撃された御堂はその場にで固まる。フェイトも顔を真っ赤にして俯いている。

「あ、あの、鳳さん。着替えてる途中だなんて気づかずすみません。」

フェイトに謝られて御堂もようやく我を取り戻す。

「こつちこそごめん。紛らわしい声あげちゃって。実は全身筋肉痛で着替えるのが一苦労なんだ。もうちょっとかかるから外で待って。」

苦笑いしながらフェイトに外に出るように促すが、

「お手伝いします。」

ちよつと待て。なんと言ったんだ、この少女は。

御堂の困惑が伝わったのだろう。

「あの、ええと、さっきの声、いろいろ大変そうだったから。あ、でも、嫌なら外で待ってます。」

本心を言おう。正直手伝ってくれるのは非常に助かる。この調子だと着替え終わるのに少なく見積もっても20分はかかる。だから、その申し出は有難い。しかし…。

『ありがとう、テストロッサさん。私じゃ正直どうしようもなく困ってたの。時間を無駄にしないためにもこちらから手伝いをお願いするわ。』

妙に優しい口調で鳳凰が告げた。

「じゃあ、鳳さん。痛かったら言うてくださいね。バンザイ。」

このとき御堂の頭ではフェイトの「言うてくださいね。」が「いつてくださいね。」と誤変換されていた。要するにそれぐらいこのときの御堂は病んでいた。

バンザイしている腕に白のトレーナを着せてもらって着替えは終わった。

ちなみにフェイトの呼び方が変わっているのは、着替え中、御堂が

「えと、テストロッサさん？」

「あ、痛かったですか？」

「いや、そうじゃなくて昨日、お見舞いに来てくれたって鳳凰に聞いたんだ。お礼を言いたくて。ありがとう。」

「いえ、大したことじゃないですから。」

「それと俺のことはできれば御堂、そう呼んで欲しいんだが。そっちのほうと呼ばれ慣れててな。」

「わかりました、御堂さん。それなら私のこともフェイトでいいですよ。」

「諒解、フェイト。」

こんなやり取りがあつたからだ。ちなみにこのやり取りの間、御堂は鳳凰から冷たい目で見られていた。

着替えが終わってからさらに20分後、ようやく御堂はクロノの指定した場所にたどり着いていた。

「遅いぞ、一体いつまで……」

そこでクロノの言葉が止まる。沈黙の原因は御堂の格好にあった。着ている服に変なところはない。だが、

「どうしたんだ、その車椅子は。」

御堂は車椅子に乗っていた。

「少々事情があつてな。」

説明する御堂。顔が赤い。なぜか車椅子を押しているフェイトの同様に赤くなっている。

「筋肉痛で歩けないんだ。」

確かに事の発端は筋肉痛なのだがもちろんそれだけが理由ではない。

フェイトに着替えさせてもらった御堂は立ち上がるうとするが、もちろん足も筋肉痛のため立てない。

「フェイト、悪いんだが手を貸してくれないか。痛くて立てない。」

「あ、はい。」

右手を差し出してくるフェイト。御堂はその手をとる。それを確認したフェイトが力をこめて御堂を立たせようとするが、

「わっ」

「きゃっ」

バランスを崩し、重なるようにベッドに倒れる。

「ごめん。」

「ごめんなさい。」

同時に謝る。が、客観的に見るなら謝るのは後にしてでもやるべきことがあった。

『御堂、いつまでそうしてる気?』

もちろん鳳凰の突込みが入る。声は冷たい。

二人は重なるようにベッドに倒れている。御堂が下でフェイトが覆いかぶさる形。そして御堂の手は丁寧にもフェイトの背中に回っている。

「あ、鳳凰、これは、その、とつさに。」

自分の状況に気づいた御堂の顔は真っ赤。しどろもどろに返答する。親族ではない異性と密着状態。それだけでも御堂の頭はヒート寸前、それがとつさとはいえ自分から抱きしめる形になっているのだ。やかんの水が沸騰、どころか鉄がA3変態してもしてもおかしくない。

『私はいつまでその体勢でいるのか、を聞いてるんだけど。』

そう、御堂は鳳凰に返答するのに必死で、まだフェイトを抱きしめたままだった。

「あ、あの、ごめん。」

あわててフェイトから腕を放すが、御堂ができたのはそこまでだった。

御堂は筋肉痛だ。9歳の女の子とはいえ立たせる力はない。

そしてフェイトも御堂と同様に混乱の極みにあった。そのため御堂の上から動けないでいる。

おそらく御堂が腕を放したことに気づけていない。

「あの、フェイト。」

仕方なく御堂から声をかける。

「あ、ごめんなさい。」

ようやくフェイトも我に返ったようだ。御堂からあわてて離れる。「その、御堂さん、筋肉痛なのに私、大丈夫ですか?」

このときの御堂はまだ混乱から立ち直っていなかった。故にこんな返答をした。

「いや、大丈夫、大丈夫。むしろいつでもウェルカム。フェイトみたいになかわいい娘なら大歓迎さ。」

もちろんフェイトの顔は再沸騰。そしてそんなフェイトを見て自分は何を言ったか理解した御堂も再沸騰。そして沈黙が支配する。お互いに何をしゃべっていいかわからない。

『いい加減にしないと話が進まないわよ。』

見かねた鳳凰が割ってはいる。が、

「あの」

「あの」

二人同時に切り出してまたしても沈黙。

『ふう、フェイトさん。できれば車椅子を用意してもらえないかしら。』

ら。

仕方ないので鳳凰が話を進める。

「え、車椅子ですか？」

フェイトは疑問を浮かべる。

『御堂が立てないし、歩けない役立たずだからお願いできるかしら。』

』

「おい、鳳凰、別にそこまでしてもらわなくても…。」

役立たずと言われたのも少々むかつくし、フェイトにこれ以上迷惑をかけるわけにはいかない御堂は反論する。しかし、

『へえー、御堂は立とうとしたり、歩こうとする度にフェイトさんに抱きつきたいのね。そっちのほうがフェイトさんに迷惑がかかるんじゃないかしら。それとも御堂はそんなことがしたいのかしら。だったら御堂は神性のロリコンね。』

「すいません。車椅子をお願いします。」

御堂はあっさり折れた。

これが御堂が車椅子に乗ることになった経緯である。もちろんあのまま話してはいない。

「まあ、いい。艦長が君と話をしたいそうだ。ついてきてくれ。」

開きれながらクロノはそう言い歩き出す。それに従いついていく御堂。というか車椅子を押すフェイト。

「フェイト、艦長つて？」

移動の途中にフェイトにたずねる。

「私たちの艦、次元の海を行き来するアースラの艦長、リンディ提督。クロノのお母さんでもあるんだよ。」

「親子で同じ職場か。大変そうだな。」

「どうだろう？ 私にはそんな感じには見えないかな。」

そんなことを話していると目的の部屋に到着したようだ。

「艦長、失礼します。鳳御堂を連れてきました。」

クロノがそう告げて部屋に入る。もちろん御堂とフェイトも部屋に入る。

「鳳御堂です…、若っ。」

御堂はあまりの驚きに思ったことが口に出てしまった。だって、母親でしかも提督がこんなに若いものなのか。

「あらあら、うれしいことを言ってくれるわね。」

目の前の女性がそんなことを言ってくる。が、御堂は考え直す。

(そうか、この人は秘書とかそんな人に違いない。)

そう思い、口を開こうとするが、

「艦長、そんなことより早く本題に入りましょう。」

クロノが目の中の女性に対してそう告げる。フェイトに目で問いかけると、

「うん、あの人がリンディ提督。」

マジらしい。

「もう、クロノはせっかちね。」

そういつて和やかに笑うリンディ提督。しかし御堂に向けた視線は真剣だった。

「私はアースラ艦長、リンディ・ハラオウンよ。鳳御堂さん。早速で悪いけど、あなたのことを聞かせてもらえないかしら。」

「話せることなら。」

御堂の態度は素っ気ない。これは管理局を信用しているわけではないことを伝えるためだ。

「ええ、それで結構です。」

「どうやら伝わったらしい。リンディ提督の声も幾分険しい。」

「それで、クロノ執務官からの報告によると、あなたは昨日、結界の反応を探知、様子を見に行ったら相手が思いのほか強く撃墜された。間違いはないですね。」

「昨日の激戦をたったそれだけで片付けられるのはあれだが、その通りなので頷いておく。」

「間違いありません。」

「それではあなたが様子を見に行ったのは、個人的な好奇心からですか、それともあなたの後ろには何らかの指揮系統があるのですか？」

「リンディ提督は御堂の背後の組織を探りにきた。この辺は御堂も予想しているため、よどみなく答える。」

「直接誰かの指示を受けたわけではありません。ただ、最近魔術師ばかりが狙われる襲撃事件が起きていて、俺の所属している特殊戦技教導隊、その母体である魔法工学研究所の人間も何人が被害にあっていましたから。襲撃事件についての情報収集の要請が来ていたのは事実です。」

「嘘をつくメリットがないので事実を話す御堂。リンディ提督もそれがわかっていいるのか突っ込みはない。」

「では、その、魔法工学研究所、は事件の早期解決を望んでいる。そう捉えて問題はないですね。」

「まあ、こちらとしても被害は少ないほうがいいですから。」

「少々ばかりして答える御堂。魔法工学研究所は早期解決よりも長期化したほうが利益になるなら間違いなくそうするような組織だ。はっきりと回答はできない。もちろん俺もその考えだ。」

「はっきりしませんね。では質問を変えましょう。魔法工学研究所はこの事件の情報を知りたい。そりは間違いありません。そして鳳さん、あなた自身も。」

「こっちの考えをすべて見通しているような質問の変え方だな。御

堂はもう諦めることにした。

「ええ、その通りです。ちなみに情報次第ではあなた方管理局と敵対することもありますので俺を拘束するなら今のうちですよ。」

苦笑しながら答える御堂。

「心配しなくてもいいわ。こちらの持っている情報を見れば『敵対』という選択肢はなくなると思うから。」

「軍事力での威嚇なら通用しませんよ。」

力に屈しないことを明言する御堂だが、

「そんな手段には出ないわよ。ところで鳳さん、仲の悪い組織同士を仲良くさせる方法、知ってる？」

「え…、それは共通の敵を用意する、ですよね。」

御堂はその質問の意図がわからなかったため素直に自分の考えを述べる。

「正解よ。今の状況はまさにそういう状況なの。」

「どうやらかなりまずい状況らしい。」

「さて、それで今後についてなんだけど私たちの方針は決まっています。」

リンディ提督の話をもとめるところだ。

・今回の魔導士襲撃事件は「闇の書」と呼ばれるロストログア（遥か昔に開発されたオーバーテクノロジーの危険物の総称）が絡んでいる。

・今回の事件に対して管理局側はリンディ提督のアースラを担当にすることを決定。

・ただしアースラはドックで化粧直しのため使用不可。

・そこで襲撃者側の拠点であると思われる、「地球」に対策本部を設置し対応する。

「それで、俺にどうしろと？」

話を聞き終わっても御堂はピンと来ない。そこまで準備ができているなら御堂が口や手を出せる状況ではない。

「端的に協力して欲しいのよ。騎士と一対一で戦えるあなた個人の

力ともうすでに構築しているであろう魔法工学研究局の情報網は私
たちにとっては魅力的だから。」

リンディ提督から示された闇の書の情報に関してはかなり衝撃的
だった。完成したら世界が滅びるとか冗談ではない。しかし、この
情報で研究局が動くかはわからない。だから御堂はこう答えるしか
なかった。

「俺個人でなら協力します。でも組織ぐるみでの協力は約束できま
せん。」

リンディ提督はそれで十分とばかりにうなずいて、
「ではこれからよろしくね。」

ここに暫定的ながらも協力体制は成立した。

「ところで鳳さん、お昼まだですよね。」

話が一段落したところでリンディ提督に尋ねられる。実は御堂、
寝過ぎたのと筋肉痛のせいで昼どころか朝から何も食べてない。

「実はどたばたして朝から何も食べてないです。」

「では一緒にいかがですか。」

誘われた。断る理由もないので了承しようとするが、

「その前に医務室に言っ来て。」

クロノからそう告げられた。

「医務室？」

怪訝な顔で聞き返す御堂。確かに魔力は枯渇、筋肉痛で動けない
が、両方とも時間以外に薬はない。少なくとも御堂はそう思ってい
た。

「治療魔法をかけてもらえばその筋肉痛も少しはましになる。それ
にその体じゃ食器ももてないだろう。」

筋肉痛がましになると聞いて驚く御堂。最初から医務室に頼れば
フェイトに着替えを見られることも、鳳凰にロリコン扱いされるこ
ともなかったのだ。

「それじゃあ、医務室にいきましょうか、御堂さん。」

フェイトがその声をかけて車椅子を押ししてくれる。
『良かったわね、御堂。筋肉痛が治りそう。』
鳳凰が声をかけてくる。文面だけ見れば優しい言葉だがところどころにとげがあった。

御堂は医務室で治癒魔法をかけられた後、フェイトと一緒に食堂に入った。フェイトに教わりながらご飯を受け取り、席を探していると、

「鳳さん、フェイトさん、こっちよー。」

こちらを見つけたリンデイさんが声をかけてくる。どうやら席を確保してくれているようだ。

近づいていくとクロノと、あと一人マンガ肉にかぶりついている獣耳の女性がいた。

「遅いぞー、フェイト。」

「ごめんね、アルフ。」

獣耳の女性がフェイトに声をかける。どうやらアルフというらしい。

「フェイト、この女性は？」

御堂が尋ねる。

「私はアルフ。フェイトの使い魔さ。」

フェイトが答えるより早くアルフ本人が答える。

「俺は鳳御堂。よろしく。」

そう言いながら席に着く。

「あら、鳳さん。筋肉痛はもういいんですか？」

リンデイさんに尋ねられる。

「おかげさまで痛みは引きましたよ。」

筋肉痛の痛みから解放された御堂は笑顔だ。

「あら、残念。せつかく腕が痛くてあがらない、とか甘えてくれればフェイトさんが食べさせてくれたかも知れないのに。ね、フェイトさん。」

「ぶっ」

「えっ」

御堂とフェイトは即座に反応、というよりも顔が真っ赤だ。どこまで知ってるんだ、この人は。

二人の反応を疑うクロノとアルフ。

「あああら、冗談のつもりだったのに。顔真っ赤にさせてかわいいわね。」

リンディさんに逆らっちゃいけない。御堂はそう誓った。

「ところで私たちこの後すぐ地球に向かうのだけれど、鳳さんはどうします?」

昼食もお茶で締め、というタイミングでリンディさんがそう聞いてきた。

「できればそれに同行させてください。」

単独での次元転移ができない御堂には選択肢はない。

「では、食べ終わったらすぐに出発しましょう。」

次元転移を経て御堂は地球に帰ってきた。

「艦長、こちらの設備は整ってます。」

「ありがとう、エイミィ。」

なにやらマンションの一室らしいがコード類がやたらとのたくつている部屋が見える点からもそれなりの改装したらしい。

「クロノ、ここはどこだ?」

御堂はとりあえず聞いてみる。

「ここは海鳴市のマンションの一室だ。今回のことはなのはの護衛も兼ねているからな。」

なるほど。

「それと君のこちらでの連絡先を聞きたいのだが。」

「ああ、どこかにメモ用紙あるかな。」

御堂は自分の連絡先をクロノに渡す。

「それじゃ、俺は自宅に戻るから何かあったら連絡くれ。」

報告などがあるため御堂は自宅に戻るうとする。ちなみに御堂の自宅はここから徒歩15分の距離にある。

御堂がドアを開けると女の子3人組が呼び鈴を押そうとしているところだった。その内の一人は御堂も知っている。確か高町なのだ。向こうもこちらに気づく。

「御堂さん、もう大丈夫なんですか？」

なのはが声をかける。

「ああ、魔力が枯渇してるがそれ以外は…むが。」

問題なし。そう言うつもりだったのだがなのはに口を塞がれる。

「魔力…。この人、大丈夫？」

「まあまあ、アリサちゃん。正面きってそんなこと言っちゃだめだよ。」

後ろの二人に酷いことを言われている御堂。

「御堂さんだめだよ、アリサちゃんとすずかちゃんには魔法のこと秘密なんだから。」

なのはが小声でささやく。

「マジで？それは済まん。だがどうする？ごまかしようのないほどはつきりと聞かれてるんだが。」

御堂も小声で返す。

「それは私からフォロワーしとくよ。」

「助かる、高町さん。」

「なのはでいいよ。私が御堂さんって呼んでるんだから御堂さんにもなのはって呼んでほしいな。」

「諒解。それじゃあフォロワー頼むよ、なのは。」

それで別れようとするが、

「ここから出てきたって事はあんたフェイトの知り合いよね？なんかなのはとも親しそうだし。」

気の強そうな少女から声をかけられる。

「それに魔力とか言ってたけどあんた何者？」

さらに問い詰められる。

「アリサちゃん、この人は鳳御堂さん。それでええと…。」
「なのはがフォローに入ってくれたが途中からしどろもどろになっていく。そのせいでますます視線がきつくなる。」

「俺は鳳御堂。職業は魔術師。なのはと出会ったのは3ヶ月前。俺が仕事で追っていた吸血鬼がなのはを襲っててな、それを俺が助けたのが縁だ。フェイトとの出会いもそんなに変わらない。あの時は人狼だったかな。」

御堂は堂々と自分が魔術師であることを名乗る。

「そのときのことはなのはに秘密にしてもらってたんだ。俺が魔術師だつてことはあまり多くの人に知られていいことじゃないからな。」

御堂は大真面目に言い切った。若干の嘘は混じっているがほとんど事実だ。

もちろんアリサは納得しない。

「ちょっと、私にそれを本気で信じろつて言うの。」

「信じなくてもいいが俺が魔術師であるのは事実だ。」

「いたつてまじめに返答する御堂。」

「じゃあ、証拠を見せなさい、証拠を。」

熱くなるアリサ。ここまでは御堂の計画通り。

「魔力が枯渇してるつて言っただろ。だから今は無理だ。」

もう少しすれば「すごく変な人」ぐらいのレベルを張られるぐらいで引き下がるだろう。そう考えながら御堂はまともに相手をしていない(言っていることのほとんどは事実だが)。

「この。」

「アリサちゃん。ちょっと…。」

「止めないで、すずか。」

ここで今まで黙っていたおとなしそうな娘が会話に入ってくる。すずか、というらしい。

「でもここ、マンションの廊下だよ。あんまり騒いじゃだめだよ。」

ナイスフォローだ、すずかちゃん。御堂は心の中でガツツポーズ。せつかく作ってくれたチャンスを生かすべく御堂は畳み掛ける。

「アリサちゃんとすずかちゃん、だったかな。フェイトに用があるんだろ？呼んでやるよ。」

フェイト、友達が来てるぞ。」

部屋の中に向かって声をかける御堂。

「はい。」

フェイトが返事をする。

「それじゃあ、仲良くな。」

こうして御堂はこの場から離脱を図る。が、そうは問屋が卸さない。

「待ちなさいよ。これからフェイトと一緒に翠屋って言う喫茶店に行く予定なの。なのはの両親がやってるんだけどケーキもお茶もおいしいの。あんたも一緒にどうぞ。」

「いや、これから用事がある。」

御堂は断ろうとするが、

「へえ、かわいい子の誘いを断ってでもやらなきゃいけない用事って何。」

どうやらアリサは喫茶店で尋問の続きを行つつもりらしい。御堂に断る権利はなさそうである。

「はいはい、わかりました。付き合いますよ。」

御堂は諦める。

そうこうしているうちにフェイトが出てくる。

「それじゃあ、翠屋にゴー。」

アリサを先頭に翠屋へ向かう。

「すみません、鳳さん。アリサちゃんの強引な誘いを受けてもらって。」

翠屋への道中、すずかが御堂に話しかける。アリサとなのははフェイトと並んで少し前を歩いている。

「ははは、別にいいさ。大した用事があるわけではないしな。それとできれば御堂と呼んでくれ。」

「それじゃあ、御堂さん。あの、アリサちゃんに話したことは本当なんですか？」

少し心配そうに聞いてくる。

「少し虚構も入ってるが概ね本当だ。なのはやフェイトとの出会いが嘘の部分だな。」

あっさりと自分の嘘を認める。

「じゃあ、」

すずかは少し安心したように続ける。

「ああ、なのはは吸血鬼に襲われてないし、フェイトも人狼に襲われてないよ。」

御堂が答える。だが、新たな疑問が生まれる。

「それならどうやってなのはちゃんと出会ったんですか？」

「それは…。」

「すずかー、早く来なさいよ。」

前方からアリサが叫んでいる。いつの間にかかなり遅れていたようだ。

「少し急ぐか。」

そつすずかに告げる。

「あ、はい。」

すずかの返事を聞いた御堂は駆け出し、すずかもそれに続いた。

翠屋に到着した一同。オープンテラスの席に案内され飲み物を注文する。

「さて、しっかりと質問に答えてもらおうよ。」

アリサによる鳳御堂への尋問が始まった。

「あんた、魔術師だって言ってたけどホントなの。」

このアリサの質問にギョツとなるフェイト。それに気づいた御堂は目線で大丈夫であることを伝える。

「確かに俺は魔術師だ。だが、できればこんな場所でその言葉は使わないで欲しいんだが。さすがに、不特定多数の人間に聞かれていい話じゃないからな。」

流行っているのだろう。結構な数のお客さんがいる。

「その割には私たちには簡単にしゃべったじゃない。」

「なのはとフェイトの友達なんだろ。それで十分だ。」

この返しにはさすがのアリサも沈黙。しなかった。

「フェイト、なのは。こいつの話ホント？」

矛先がなのはとフェイトに向いた。

「…うん、ホントだよ。」

「…そうそう、ホントだよ。アリサちゃんも疑い深いなあ。」

二人とも妙な間を空けて、しかもごまかしているのが丸わがりの苦笑い。

もちろんアリサの疑いは強まっている。

だが、助け舟は思わぬ場所から来た。

「あ、アレックスさん。」

なのはが声を上げる。

「こんにちは、なのはさん。」

アレックスと呼ばれた男性がこちらに近づいてくる。なにやら大きな包みを抱えている。

「フェイトさん、これリンディさんからフェイトさんです。」

アレックスは包みをフェイトに渡すと、

「仕事がありますから」

そういつて去っていった。

「これ、何かな？」

さすがにフェイトに聞くが、

「何だろう？」

フェイトも知らないらしい。

「開けてみなさいよ、フェイト。」

どうやらアリサの興味は御堂から逸れたようだ。

ありがとう、アレックス。御堂は心の中で感謝する。

フェイトはアリサに促されて包みを開けたようだが中から出てきたものに困惑している。アリサ、すずか、なのはには何か分かるらしく嬉しそうだ。御堂も気になって覗き込んでみると

「制服？」

中に入っていたのは制服だった。

「御堂さん、この服は…？」

フェイトが尋ねてくる。

「俺の記憶が正しければ近所の金持ち学校のものだったはずだが…。まあ、リンディさんに聞いてみれば分かるんじゃないか？」

噂をすれば影。とはよく言ったものでリンディさんが翠屋に入っていく。おそらく引越しの挨拶だろう。

「ほら、フェイトちゃん。」

なのはがフェイトを促す。

「う、うん。」

フェイトが翠屋の店内に入る。もちろん御堂たちも続く。

「フェイトちゃん、3年生ですよね。学校はどちらに？」

翠屋のマスターがリンディさんに尋ねている。

「はい、実は…。」

「リンディ提…、リンディさん。」

フェイトがリンディさんに声をかける。

「はい、なあに？」

「あの、これ、これって。」

「転校手続きとつといたから、週明けからなのはさんのクラスメイ
トね。」

「素敵。」

「聖祥小学校ですか、あそこはいい学校ですよ。な、なのは。」

「うん。」

「良かったわね、フェイトちゃん。」

「あ、はい、ありがとうございます。」
照れるフェイト。朝のあどきに比べればましたがそれでも相当赤くなっている。

「そろそろいい時間だし解散しないか？」

フェイトの聖祥編入関連の騒ぎが一段落したところで御堂はそう提案する。確かにもう5時前だ。12月なのでもう外は日が落ちて
いる。

「そうね、もう遅いし、解散しましょう。」

意外なことにアリスが一番に同意してくる。もつとしつこく問い詰めてくるものだと思っていたのだが、案外とあっさり引き下がって、

「でも、まだ納得したわけじゃないからね。」

くねなかった。

御堂は無視してレジのマスターに5人分の伝票を渡す。

「一緒に一緒で？」

「さすがに年下の女の子とお茶して割り勘、なんて情けない真似は
できませんよ。」

そう言いながらお金を払う。

「「「「ご馳走様でした。」」」」

「まあ、これぐらいならいつでも。」

一同はそんなやり取りをして翠屋の前で解散した。

『御堂。』

解散して一人になるのを見計らって鳳凰が声をかけてくる。

「ん、鳳凰。どうかしたか？」

『うつん、なんでもないわ。ごめんなさい。』

その後は自宅まで御堂も鳳凰も無言だった。

「ロストログア『闇の書』。魔導師の魔力と魔導資質を蒐集して自らのページを埋めていく魔導書。そのページが最後まで埋まると闇の書は完成する。完成すると世界の崩壊などロクな事にはならない。」

「管理局側からもらった「闇の書」の資料を読んだ御堂の呟きである。」

「どう思う、鳳凰？」

『もし完成したらえらい目を見るのは確かでしょうね。』

「だよなあ。」

そのまま沈黙。

しばらくして鳳凰が話しかける。

『ねえ、御堂。私と出会ったこと、後悔してる？』

「どうしたんだよ、急に。」

鳳凰がこんなことを尋ねてくるのは初めてだ。

『今日の御堂、女の子たちと楽しそうに話してたから。もし、私と出会わなければあんな感じで女の子と話したりお茶したり、平和に暮らせたんじゃないかと思って。』

なんとも、まあ。

御堂は笑い出した。

『何よ、私は御堂のことが心配で。』

「いや、悪い。大丈夫だよ、鳳凰。お前とであったからあいつらとも出会えた。そのことには感謝したいぐらいなんだ。それにさ、俺はお前を気に入ってるんだ。お前と出会ったことが運命とか宿命とかなら、俺はそれに感謝はするが恨むようなことはないよ。」

『でも、御堂。』

「その話はもう終わり。魔力の回復には十分な睡眠時間が必要不可欠だろ。そういうことだから俺はもう寝るな。おやすみ、鳳凰。」

そういつて布団にもぐりこむ御堂。

『御堂、ごめんなさい。』

誰にも聞こえない声で鳳凰はそう言った。

第二話「筋肉痛と日常の風景」（後書き）

御堂が完全に道化と化してますね。特に前半部分。そして、鳳凰の出番が少ない！アリサやすずかと一緒にいるときは仕方ないにしてもリンディさんとの話し合いからまったく出番なし。さすがに不憫だ。

今回はレイジングハートエクセリオンとバルディッシュユアサルトの起動シーンまでいく予定です。お楽しみに。

第三話「変態仮面、その力」(前書き)

御堂の能力解説のための話でしたが、なにやら怪しいことになっていきます。

第三話「変態仮面、その力」

時刻は午前八時。これは鳳凰に出会う前の鳳御堂の起床時刻である。もつとも母親にたたき起こされてようやく起きていた時刻、と言い換えるべきかも知れない。そして、

『御堂、早く起きなさい。』

…今もそんなに変わらなかつたりする。

「うん、起きてる、起きてる。」

言葉とは裏腹に布団の中から返事をする御堂の声はまだ寝ている。これが母親なら布団を引つpegがすところなのだが、

『御堂、さっさと起きなさい！』

いくら名甲といえども今の鳳凰はキーホルダー。そんな荒業は不可能だ。それをいいことに御堂はそのまま二度寝へ。

だが、それを邪魔したのは携帯電話の着信音。仕方なく御堂は二度寝を諦め、携帯に手を伸ばす。

「子供の頃の夢は色褪せない落書きで、思うまま書き滑らせて、つと。」

着唄を口ずさみながらディスプレイを見る。そこには御堂の知らない番号が表示されていた。

「もしもし、鳳です。」

とりあえず電話に出る御堂。

『御堂か？クロナだ。』

管理局の執務官からだった。

「緊急事態か？」

御堂は用件を聞く。昨日の今日だ。可能性はある。

『安心してくれ、そういうことじゃない。実はうつかりしてたんだが、君の魔導師としてのスキルなどをまったく僕は知らない。そして君も僕らのスキルをほとんど知らないだろ？これから共同戦線を張る以上お互いの能力を分かっておいたほうがいい。そういうわ

けで時間を取ってもらいたいんだが。』

緊急事態ではないことに安堵しつつも御堂の顔は渋くなる。手品の種や仕掛けを自分から喜んでばらすような手品師はいない。御堂のスキルにもばれてしまえば威力が半減するものも当然ある。

「確かにお互いのスキルの確認は必要だな。だが、なのはとフェイトの都合もあるだろ？そっちは大丈夫なのか？」

それでも御堂はこの話に反対しない。共同戦線を張る以上はお互いの能力をある程度知らないと、どこまで任せてもいいのか分からない。

『なのはとフェイトは学校があるから午前中は無理だが、放課後なら基本は大丈夫だ。』

「それなら、こっちはいつでもいい。ただ、いつ戦闘になるか分からないからな。できるだけ早いほうが助かる。」

もつとも、今すぐ戦闘になったとしてもまだ魔力が回復しきっていない御堂にできることなどない。

『分かった、時間が決まり次第、連絡する。』
そう言っただけクロノは電話を切った。

「さて、今日はどうするかな。」

クロノからの電話ですっかり目が覚めた御堂は食堂でトーストにイチゴジャムをたっぷり塗っていた。

『御堂、今日の予定を考えるより自分の健康を考えなさい。どう考えても糖分の取りすぎよ。見てるこっちの気分が悪くなるわ。』

鳳凰の指摘どおり、御堂が持つトーストに塗られているジャムの厚みは約10mm。

「頭脳労働には甘いものが一番だろ？」

実際に脳を働かせるのは糖分なのだがいくらなんでも塗りすぎだ。『その働く予定がしばらくくないでしょう。』

鳳凰の言うことも事実である。銀鍵守護神機関なしでこなせるほど特殊戦技教導隊の仕事は甘くない。

「だからこそ、だ。休日を有意義に使うために頭を働かせるんだ。」
トーストを齧りながら答える。

『もういいわ、好きにしなさい。』

諦める鳳凰。実際、御堂の甘い物好きというよりも中毒は鳳凰に会う前からのものだ。本人に直す意思がない限り更正は限りなく不可能に近い。

「そうさせてもらうさ。」

そう言いながらマグカップのミルクティーを一口飲む。このミルクティーは御堂の特製だ。ゲームのキャラを真似て角砂糖を6つ入れている。最初はネタのつもりで作ったのだが、妙に気に入ったため現在は砂糖6つがデフォになってる。

『その紅茶だけでもどうにかならぬかしら……。』

鳳凰が一人(?) 呟くが御堂には聞こえていない。

御堂は昨日まではリンカーコアを蒐集されて魔力が枯渇状態にあった。しかし、御堂も17歳。なのは程でもないにしてもリンカーコアの修復も早い。銀鍵守護神機関こそまだ起動できないが、闇金の取立てぐらいなら楽に返り討ちにできるほどには回復している。

「リハビリがてら、なのはやフェイトの様子を見に行くぞ。」

朝食を食べ終え、出かける支度をした御堂は鳳凰とともに聖祥小学校へと足を運んだ。

「とっ。」

開いている校門ではなく、あえて壁を乗り越えて敷地に降り立つ御堂。そして体育を行っているクラスに目をやるが、

「そこそこかわいい子はいるんだけどなあ、俺のツボにははまらない。」

「そう言つと堂々と校舎へと向かう。」

こんな不審人物を止めるはずの教師はただ、呆然と見ているだけ

だ。もちろん生徒たちもあっけに取られている。

「堂々としてれば意外に怪しまれないものだろう。」

御堂が鳳凰に語りかけるが、

『どう考えても怪しすぎるあなたにドン引きしてるわよ。』

鳳凰が呆れた声で返事する。

確かに今の御堂は変人そのものの格好をしている。とは言っても、服装はごく普通に綿パンとコート。猥褻物を陳列しているわけでは決していない。そもそも御堂は寒さが苦手なのだ。この時期は完全防寒装備のため、顔以外は外気に触れることはない。そして、このときは首から上が問題だった。

目を白いメガネで隠し、頭にはシルクハット。ぶっちゃけ、首からは有名なアニメの仮面ヒーロー。ただし、首から下はタキシードではなく完全防寒装備。このミスマッチがドン引きの原因である。

このまま堂々と校舎に乗り込んでもいいが、それではリハビリにならない。そのため、御堂は教師に歩み寄る。

「お尋ねしたいのですが、この学校で一番の美少女がいる教室はどこでしょうか？」

「ここでようやく教師が反応する。」

「こ、この学校は関係者以外立ち入り禁止だ。い、今すぐ立ち去りなさい。」

もちろん御堂は取り合わない。

「答えてくれないのなら、適当に校舎を回るんで。」

そう言うつと校舎に向かって走る。

我に返った教師が追いかけてよとするとすでに御堂の姿は校舎の中に消えていた。

『学校に不審者が侵入しました。生徒の皆さんは先生の指示に従って教室で待機してください。先生方は不審者が教室に入ってきてもあわてずに安全を最優先に行動してください。繰り返します…。』

校内放送が鳴り響く。

「不審者だつて。この学校大丈夫なのかしら？」

声の主はアリサ。なのは、フェイト、すずかも一緒にドアから離れたところに避難中。

「きつと、大丈夫よ。」

すずかが答える。聖祥小学校は仮にも名門私立である。警備も公立小学校よりも気合が入っている。

「いや、この程度じゃ無理だろう。」

御堂が反論する。例の変態スタイルで。

「現にここまで侵入できたわけだし。」

御堂がいるのは窓の外、というより窓から教室に入ろうとしている。ちなみにここは一階ではない。

「えっ。」

教室中の視線が変態御堂に集まる。

「そんなに見るなよ。照れるじゃないか。」

もちろん照れてなどいない。一度言ってみただけである。

「えと、御堂さんですよ？いったい何を…。」

声から気づいたらしいフェイトが尋ねるが、

「いやいやいや、フェイト。こんな変で格好で顔を隠してるんだ。

いきなり正体をバラすなんて空気が読めていないぞ。」

「え、その、ごめんなさい。」

どう考えても御堂が悪いのに謝罪してるのはフェイト。「冗談で言ったのに素で返されるのはいつだって辛いものがある。」

「それで、どう呼ばいいんですか？」

微妙な沈黙を破り、尋ねるのはすずか。知り合いだと分かって安心したのだろうか、幾分声が明るくなっている。

「タキシード、は着てないからな。怪盗、でもないな…。」

悩む御堂。そこへ突き刺さるのは純粹な言葉。

「変な人？」

なのはの問いかけ。そして追い討ち。

「変態。」

アリサがバツサリぶった切る。

『じゃあ、変態仮面なんてどうかしら？』

ラスボスは鳳凰でした。

「私の名は変態仮面。という事でお願ひします。あくまでもこの格好のとき限定で。」

御堂はもう自暴自棄^{やけくそ}。

「それで、変態仮面さんは一体何を？」

他のクラスメイトがドン引きの中、質問を重ねてくるフェイト。

あなたは空気が読めてないです。

「いや、初めて会ったときのフェイトは黒系統の服装だっただろう。昨日もそうだったし。そこで白を基調とした聖祥^{せいじょう}の制服を着たフェイトはどんな感じかな？と様子見に。」

そう言いながらフェイトをじっくり観察する。

「うん、白もなかなか似合ってるな。」

観察し終えた御堂は満足げにうなずく。

「ほう。」

褒められて照れるフェイト。かわいいなあ、もう。口には出ていないが御堂の表情からは考えていることが丸分かりである。

そんな感じで浸っていると、

「変質者はこっちです。」

ここのクラスの担任が屈強な男性職員達を引き連れてやって来た。いないと思っていたら応援を呼びに行っていたらしい。

「では、私は追われている身なのでここらで失礼する。さらばだ。」

そう言っって颯爽と去る、わけが無い。御堂はその台詞とともに教員達に突撃。魔力放出の恩恵を受けての驚異的な身のこなしで教員を突破。そのまま廊下を走る。

「結局、あいつは何しに来たの？」

残されたクラスの人間を代表するアリサの声に答えられる人間はいなかった。

『御堂、一体あなたは何がしたいのよ？』

鳳凰が聞いてくる。

「フエイトとなのはの様子見。あと、ついでにリハビリ。」
走りながら御堂が答える。

現在、教員と鬼ごっここの真つ最中。ただし、地の利と数のアドバンテージは学校側が握っている。そのため、挟み撃ちにされること数回。そのたびにすり抜け、転ばし、投げ飛ばしながら突破してきている。もちろん相手に怪我をさせないように注意しながらである。
『こんなのでリハビリになるの？』

鳳凰の言うことももつともである。御堂のやっていることは、普通よりも少しばかりがっしりした人間を突破しているだけなのだ。数の差があるとはいえ、普段の御堂なら準備運動にもならない。

「実際、期待はずれだ。魔法少女のいる学校、その上名門、ということまで期待していたがな。チェーンソーを振り回す用務員も出てこない。」

御堂はまた進路上に現れた教員にうんざりしながら答える。

「でも、魔力量以外はいたって正常であることが確認できたからよしとするか。」

教員を投げ飛ばしながらそう続ける。

実際、魔力不足から来る出力の低下を除けば魔力放出のスキルは正常に使えている。

『確認できたのなら、さつさと離脱しなさいよ。』

鳳凰からの忠告というかほぼ命令が飛んでくる。

「だから、今、逃げてる途中なんだろ。」

『でも、屋上に向かってるわよね？』

確かにさつきから廊下を駆けては階段を上っている。一度も下に向かっていない。

「だから、屋上から逃げるんだよ。」

『その魔力で？無茶よ。』

確かに御堂は飛行魔法も習得済みである。しかし今の魔力量で二メートルに逆らうの少々無理がある。それならば教員との遭遇率が高くてモズ関から逃げたほうがいい。それぐらいは御堂も分かっている。

だが、それでも御堂は上へ向かう。

「こんな怪しげな仮面で正体を隠してるなら、屋上から颯爽と姿を消すのがお約束。」

こんなしょうもないこだわりのために屋上へと駆ける。

鳳凰は諦めた。

『なんだか、あなたに出会ってから諦め癖がついた気がするわ。お好きにどうぞ。フォローはしてあげるから。』

「サンキュー、鳳凰。」

こんなやり取りをしながら屋上に到着した。

「もう、逃げ場はないぞ。観念しろ変質者。」

御堂は屋上に追い込まれた。正しくは追い込ませた。

「はっはっは。ここまで私を追い詰めるとはさすがは名門聖祥小学校の教員達だ。」

芝居がかつた仕種で御堂が答える。

「だが、ここまでだ。あなた方との追いかっこは楽しかったよ。では、さらばだ。」

言い終えると御堂は屋上から飛び降りた。

「痛たたた。」

着地に失敗した御堂は呻いていた。

『途中までは上手くいったのにね。』

鳳凰の言う通り、途中までは良かった。

飛び降りた直後に上着を落下傘代わりに開くまでは順調だったのだ。その後は鳳凰のフォローを受けつつ風を操作し、着地する予定だった。

それが覆ったのは電話が鳴ったからである。

「はい、もしもし?」

『ちよつと、御堂!』

電話に出る。その行為は片手が電話で塞がっていることを意味する。

その結果、御堂は、

「にゃああああ。」

落下速度の制御に失敗。地球にキスすることになった。

『それで、さっきのすごい音はなんだったんだ?』

電話の相手はクロノ。

御堂はあの後、顔面が痛むのをこらえて聖祥小学校から離脱した。気にしない、気にしない。それよりも本題は?」

さすがに小学校に乱入していたなんて言えない。

『ああ、朝言っていたお互いのスキルの確認なんだが、なのはとフエイトも放課後なら基本大丈夫という事で今日の4時ごろにやろうと思う。だからその時間ぐらいに本部に来てくれ。』

「あい、分かった。」

そう言つと電話が切れた。

「えーと、確認するぞ。なのはは誘導操作弾と砲撃が得意で防御は厚い。フエイトがスピードがあつて、クロノが器用貧乏。それでいいんだよな。」

御堂が顔を見ながら先ほどまでの話をまとめる。

「物言いが気に入らないが大体あつてる。次は君の番だぞ。」

クロノが答える。

会話から分かるようにお互いの手の内のバラし合いをやっている。なのは、フエイト、クロノが終わつたので次は御堂の番だ。

「とりあえず、一通り説明が終わつたら質問を受け付けるから、それまでは口を挟まないでくれよ。」

そう言うと御堂は説明を始めた。

御堂のスキルをまとめると、

・銀鍵守護神機関

御堂の魔力の源であり、鳳凰が御堂を仕手として選んだ最大の理由。

異界と繋がっている『門』を開き、そこから、ほぼ無尽蔵に近い魔力を取り出せる。取り出せる魔力量は門の明け具合によって左右され、開けば開くほど取り出せる魔力は多い。

御堂の魔術戦闘はこの機関の存在を前提に成り立っており、ここからの圧倒的な魔力量を最大限に利用する。

強いて欠点を上げるとすれば、制御には死ネクロノミコン霊秘法系統の魔導書が必要であること、万が一、暴走すると『門』から『外アフター・ユニタなる神』が出てきて世界が減ぶ、といったところである。ただし、この機関は厳重にリミッターがかけられている為、暴走の可能性はゼロに近い。

なお、この機関は過去に魔導機械の動力源に使用された実績はあるが、人が保有していた例は御堂しか確認されていない。

・ネクロノミコン アル・アジフ訳 日本語写本

御堂の保有する魔導書。ネクロノミコンの原書、アル・アジフ本人による写本。

しかし、御堂が手にした時にはかなりの記述が失われており、現在あるのは以下の記述のみである。

- ・飛行ユニット『シャントク』
- ・炎の神性『クトウグア』
- ・氷の神性『イタクア』
- ・門の神性『ヨグソトース』

なお、銀鍵守護神機関の制御に必要なのは『ヨグソトース』の記述である。

・劔胄「鳳凰」

御堂の切り札。

待機状態ではキーホルダー、第一段階では日本刀、完全開放では鎧になる。

元来、劔胄は人の魂のこもった鎧であり、鍛冶師が一生に一度、命を散らして打つものである。

その戦闘力は圧倒的で、劔胄を纏った者はそれが例え、非力な一般人であっても、空を翔け、鋼を断つ。さらに業物になると陰義しのぎと呼ばれる魔術にも似た超常能力を備える。業物の劔胄を纏った天賦の才を持つ者ならば、一人で師団規模を相手に渡り合える。

しかし、その製造方法により、量産が効かないうえに後継者不足に悩まされていた。

また、鍛冶師の腕による品質のバラツキが大きい、仕手の熱量を奪うことで性能を発揮する特性から長時間の戦闘ができない、など近代戦では「強力だが使いにくい武器」とされ、次第に廃れていった。

とどめに、第二次世界大戦での徴兵による人狩りで劔胄鍛冶は打った劔胄諸共全滅。現在ではロストテクノロジーとなっている。

そして御堂が纏う「鳳凰」は人によって打たれた劔胄ではない。

鳳凰を打った鍛冶師は「旧神」エルダー・ゴッド。

神によって打たれた神造劔胄。

そのため、性能は過去の業物と呼ばれる劔胄すら圧倒する。

しかし、熱の奪われ方も半端ではなく並みの人間は一分以内に凍死する。

これを御堂は銀鍵守護神機関からの魔力を熱に変換することで維持している。

また、鳳凰の陰義は仕手の資質強化、武具の具現化である。

・魔力放出

御堂の所持スキル。自分の体内に魔力を循環させ、必要に応じて集中、放出することにより身体能力を飛躍的に高める。

特に御堂の場合は銀鍵守護神機関からの大出力、無尽蔵の魔力を得られるためかなりの効果がある。

・鳳御堂

御堂の属性は赤と青の対抗色二重属性。通称、イゼット。

赤の魔術師は炎と電気の扱いに長けており、速度、攻撃力が高い。また、人工物の破壊も得意とする。

青の魔術師は水と氷の扱いに長けており、敵の妨害および飛行特性が高い。また、限定的ながら運命干涉系の術も存在する。

「と、こんなもんかな。」

ところどころ鳳凰が補足に助けられながら話し終える御堂。他の皆さんは呆然。

「何か、聞きたいことは？」

一同を見回すが反応なし。

「じゃあ、俺はこれで。」

なので、御堂はこの場から去ろうとする。

「ちよつと、待て。何だこれは？本当なのか？」

そこへ復活したクロノが慌てて呼び止める。

「本当だ。それに嘘をつく理由がない。」

御堂は答える。

「なんだ？俺のあまりのチートっぷりにびびったか？」

御堂は冗談めかして言うが、

「当たり前だ。特に最初の3つなんか完全にロストロギアクラスじゃないか。」

なぜか、クロノはキレ気味だ。他の人間はクロノの言葉に頷いている。ただし、リンディさんだけはなぜか難しそうな顔。

「悪いが、ロストロギアの不法所持で拘束させてもらうぞ。」

クロノが一瞬で自分のデバイスとバリアジャケットを展開し、御堂にバインドをかける。

「管理局ってのはこんな手荒なことをするのか？」

御堂は今までの軽い雰囲気から一転、冷めた声で淡々と尋ねる。

「ロストログアの暴走で滅んだ世界がいくつもあるんだ。そんな危険なもの、放置していいわけがない。」

クロノは杖を突きつけてくる。

「そうか、よく分かった。それじゃあ、闇の書を巡る共同戦線はここで解消、ということですかいいませんか？」

御堂はリンディさんに尋ねる。能力を話した時点でこうなることはある程度予想済みだったため落ち着いている。

「そうねえ、私としては力を貸して欲しいんだけど……。」

リンディさんはクロノを見る。

「ですが、危険です。万が一暴走すれば……。」

クロノは拘束を解く気はないらしい。

『まったく、暴走、暴走と聞いてて気分が悪いわね。』

鳳凰が話しかけてくる。実はこの意見には御堂も賛成。

「まったくだ。俺たちがどれだけ対策を打っているのか聞きもしないで。こうなったらこの執務官を合法的にボコらなきゃ気が済まない。」

鳳凰と一緒にクロノをボコる算段をする御堂。

そんな御堂たちにとっては天恵ともいえる意見がなのはから出る。

「じゃあ、模擬戦をやったらいいんじゃないですか？」

「それはどうということ？なのはさん。」

クロノを説得していたリンディさんが尋ねる。

「えと、一度、模擬戦をやっつてそれで危険かどうか判断すればいいんじゃないでしょうか？どんな戦い方か見もしないで危険だつて決め付けるのは不公平だと思います。」

なるほど。そうすればクロノを合法的にボコれる。こんなチャンス逃してたまるか。

「そうです。模擬戦で見てもらえれば危険じゃないことが分かります。」

御堂が畳み掛ける。

『危険かどうか見もしないで決め付けるのは野蛮すぎるわよ。』
無然とした声で鳳凰も加わる。

「そうだよ、クロノ。模擬戦で見ても遅くないでしょ。それに私は、御堂さんの話も聞かずにそんなことをするような組織に身をおいたつもりはないよ。」

フェイトも援軍に加わる。

「どうしますか、クロノ執務官？」

言葉こそ仕事用のものだが、口調は息子に話しかけるようなものになっているリンディさん。

クロノはほぼ詰んでいる。

「分かりました。今日のところは開放し、後日の模擬戦の結果を見て今後のことを判断します。」

そういつてクロノはバインドを解く。

「それで、御堂さん？模擬戦はいつがいいですか？」

リンディさんが尋ねてくる。

「明日はまだ回復しきってないと思うんで、それ以降でお願いします。」

自分の体調を考えながら答える。

「それでは水曜日の朝10時にここに来てください。」

「分かりました。それでは水曜日に。」

これでこの場はお開きとなった。

「しかし、管理局がロストログアに固執してくるとなると少々厄介だな。」

帰り道、御堂が鳳凰に話しかける。

『そうかしら？あれくらいなら軽くあしらえるわよ。』

「リンディさんが指揮官だからだろ？あれより固いのが出てきたら

厄介すぎるぞ。」

鳳凰は楽観的だが御堂は違うらしい。

『それでも、私とあなたなら力づくでどうにでもなるでしょ。』

「だからそれがまずいんだって。」

そう、全力でやれば管理局とでも渡り合える自信はある。しかし、その後が問題になるのだ。

「管理局があまりにも傲慢だったから力づくで潰しました。さて、この後どうするんだ？」

『なるほど、その後の混乱を考えると冗談じゃないわね。』

実際に管理局のおかげで平穏を保っている側面も必ず存在する。

それを潰してしまつたらそれはそれで不味いのだ。

「だから、水曜の模擬戦では威嚇の意味をこめてある程度の力を見せる。」

そう決意を固めて御堂は家路についた。

第三話「変態仮面、その力」(後書き)

すみません。レイジングハートエクセリオンとバルディッシュアサルトの起動までたどりつけませんでした。

次回はクロノVS御堂の模擬戦。

なので、しばらくヴォルケンSは出てきません。

第四話「御堂流ブラフの使い方」(前書き)

長いこと待たせてごめんなさい。ようやく書きあげました。それではクロノVS御堂、お楽しみください。

第四話「御堂流ブラフの使い方」

そして水曜日。御堂は管理局本局の訓練室にいた。

「ここでやるのか？」

分かってはいるが念のため聞いておく。

「ああ、ここでやる。それよりも準備運動はいいのか？」

御堂と対峙するのはクロノ。まあ、なのは、フェイトはデバイスが修理中だから仕方ないだろう。

「いらない。一応済ませている。」

それに、どう戦うかも昨日のうちにじっくり考えてある。

「じゃあ、始めるぞ。」

「オーケー。鳳凰、武装開放。」

そう言つと御堂は魔導書を纏い戦闘態勢に。そして、安全装置を外す。

「銀鍵守護神機関、イゲンシジョン始動。」

体を魔力が駆け巡る。

『御堂、油断しないでよ。』

鳳凰が忠告してくる。

「大丈夫だ、油断しても負けない。」

クロノに聞こえるように言い放つ。

「ルールは無し。止め時はどちらかが降参するか、倒れるまで。それでもいいんだな？」

御堂が最後の確認。

「ああ、それでいい。」

クロノが答える。

『それでは始めてください。』

両者の確認が済んだタイミングでリンディさんが合図を出す。

「ステインガースナイプ。」

クロノは開始と同時に射撃魔法を放つ。

しかし、それは御堂に届かない。

「獅炎。」

御堂は獅炎を発砲、ステインガーを迎撃しながらクロノとの距離を詰める。

さらに竜氷でクロノの本体を狙い、反撃に転じる。

しかし、その弾丸もクロノに通らない。ラウンドシールドで防がれる。

「なかなか、やるわね。」

鳳凰がポツリと漏らす。

「執務官の役職は伊達でも梵天丸でもない、ってか。」
御堂は余裕の表情。

『でも、これぐらいの相手じゃなきゃ管理局への牽制にならないわよ。』

鳳凰もまだまだ余裕。

「その油断が命取りだ。」

いつの間にもやら、チャージを終えたらしい。クロノの杖、S2Uの先に光が集まっている。

『御堂。』

「分かってる。」

御堂も獅炎を持つ右手を引き、構える。しかし、

「遅い。」

クロノのほうが早い。砲撃が放たれる。

「そんなもんが通用するか。」

御堂はそう叫ぶと獅炎を持つ右手を砲撃に突き出す。同時に、
「必殺、加速撃ち。」

発砲。魔力放出により加速された御堂の右腕。そして拳の速度を加算された銃弾はいとも簡単に砲撃を掻き消えす。さらに弾丸は威力を保ったままクロノに届き、その手からS2Uを弾き飛ばす。

「なっ。」

驚くクロノ。だが、すでに遅い。

シヤンタクを全開でクロノに向かって翔ける。

しかし、クロノは保険をかけていた。もしも、このまま御堂がに突っ込んでいたらこの勝負は御堂の負けだった。

だが、

「うりゃ。」

御堂は掛け声とともに竜氷をクロノの目の前の空間に投げつける。

「嘘だろ。」

クロノが呻いた。それと同時に竜氷に対してバインドが発動する。仕掛けられていた罠を罠を用いてあぶり出す。

この瞬間、クロノは完全に無防備になった。

「猛れ、獅炎。」

再度、獅炎から放たれる加速撃ち。見事に直撃し、クロノを吹き飛ばす。

だが、クロノの吹き飛んだ先には先程弾き飛ばされたS2Uがあった。

クロノはそれを掴みすぐに構える。

しかし、クロノが予想していた追撃は無かった。

『御堂、無理しすぎよ。まだ、加速撃ちを連発できるほど回復してないでしょ。』

鳳凰の忠告に御堂は右腕を抑えながら答える。

「あれで決まると踏んで無理をしたんだがな、ミスった。」

御堂は竜氷のみをクロノに突きつける。

「だが、ちょうどいいハンデだろ。」

御堂はクロノを挑発する。

「良かったじゃないか、負けたときの言い訳ができて。」

クロノも負けていない。

「それじゃあ、第二ラウンドだ。」

そっぴい言って、御堂はゴング代わりに竜氷を撃つ。

モニター室ではリンディとエイミーが二人の模擬戦を見学していた。

「クロノ君、最初は圧倒されてましたけど、どうにか互角に持ち直してますね。」

エイミーが言うように現在の状況は互角。御堂は左手ですべての攻撃を捌いているが、攻撃に転じる余裕はない。クロノにしても、加速撃ちのダメージのため攻め切れていない。

「それよりも、鳳さんのほうはどう？」

リンディが尋ねる。

月曜に聞いた話から、もつとんでもない能力だと予想していた。しかし、現状は一般的な魔導師よりも少し強い程度である。

「魔力反応だけだと、AAぐらいです。でも妙なんですよ。」

そう言うのと、模擬戦のデータを画面に展開するエイミー。

「こつちが、クロノ君を吹き飛ばした時の鳳さんの魔力値です。」

「それで、これが今の魔力値なのよね。」

覗きこんだリンディが後を引き継ぐ。

「これ、本当？」

両者を見比べて驚くリンディ。

「機材が故障していないか後で調べますが、事前点検では正常でしたから、間違いないと思います。」

エイミーも困惑している。

それはそうだろう。御堂の魔力残量は加速撃ち直後と現状で変わっていない、むしろ増えている。クロノの攻撃を防ぐのに魔力を消費しているにも関わらず、である。つまり、

「銀鍵守護神機関、でしょうね。」

リンディは確信する。これにより、銀鍵守護神機関の存在は管理局側に確認された。

「あの話、ハツタリじゃなかったんですね。」

いまだに信じられないエイミー。声が少し震えている。

「だからこそ、鳳さんが防戦一方なのが気になるわね。」
リンディがそう言ったとき、状況が動いた。
クロノの砲撃が御堂にクリーンヒット。御堂が吹き飛ぶ。

『御堂！』

鳳凰の声で意識を繋ぎ、受身を取って着地する御堂。

「助かった、鳳凰。」

さすがに左手一本では防ぎきれず、キツイのをもらってしまった。
だが、勝負が決まるほどのものではない。

それはクロノも分かっている。すぐに追撃が来た。

「ステインガースナイプ。」

御堂はそれを左手の竜氷で殴りつけて迎撃し続ける。照準を定める暇がないための苦肉の策だが、何とか防げる。

しかし、

「くそ、まずい。」

顔を反らし、ステインガースナイプの顔面直撃を辛うじて避ける。
が、余波が左肩を掠める。御堂は徐々に追い詰められているを感じる。

『御堂、そろそろまずいわよ。』

鳳凰もそう感じているのか声が苦しい。

「もう少した、踏ん張るぞ。」

御堂は何かを狙っている。その証拠に御堂の目は諦めていない。

クロノはあせっていた。御堂が右手を使えなくなってから、いや、使わなくなってからには戦いの主導権はクロノが握っている。しかし、決定打に欠いている。御堂のあの「加速撃ち」を警戒すれば大技は迂闊に使えない。

追い込んでいる実感はあるのだが、御堂の目は何かを狙っているのがモロバレだ。それに、先ほどの右手の話はどうか考えても御堂の仕掛けたブラフ。それなりに修羅場をくぐったクロノの直感がそ

う告げている。できれば主導権を握っている今のうちに決めたい。それがクロノの偽らざる心情である。

最初に異変に気がついたのはモニター室のエイミイだった。

「艦長、見てください。」

そう言っただけで示した画面には御堂の魔力の流れが表示してあった。

「え？」

リンディは固まる。先ほどまではAAぐらいの魔力値だった御堂。それが今や、オーバースまで膨れ上がっているのである。

そして、その大部分は加速撃ちの連発で使えなくなったはずの右手に集まっている。

クロノは御堂の異変に気づいていない。だが、御堂が何かを狙っているのは分かっている。そして、その鍵となるのは十中八九、御堂の右腕だ。そのため、常に御堂の右腕に注意を払いつつ、隙の大きい大技ではなく、隙の少ないやり方で御堂を追い詰める。

御堂は徐々に追い詰められている。致命傷はないものの体中擦り傷だらけだ。それでも、ここで大技を叩き込めば戦況は五分に戻せる。しかし、それではここまでの仕込がすべて無駄になる。そのため、御堂は体に傷が増えるのを厭わずにひたすら耐える。最後の限界まで準備を整えるために。

「そろそろやるぞ。」

準備を終えた御堂が宣言する。

『こつちも準備終了。いつでもいけるわ。』

それに鳳凰が答える。

御堂はそれに頷くと、左手を引き構える。それはまさしく加速撃ちの構え。

「吼えろ、竜氷。」

しかし、放たれた弾丸はクロノを狙っていない。それでも、それは圧倒的な威力で突き進み、御堂を狙うスティングースナイプの全てを粉碎する。

クロノの攻撃は全てかき消され、御堂も追撃をかけなかった。そのため、その場には静寂が訪れた。

「クロノ、今の一発で加速撃ちは打ち止めた。さすがにもうあれは撃てねえ。」

左手の竜氷をホルスターに収めながら御堂が言った。実際に、クロノの攻撃を全て左手で受けてきたのだ。その負担は相当のものである。

「わざわざ教えてくれるとは、どういっつもりだ？」

クロノは構えを崩さない。その表情には警戒の色しか浮かんでいない。

「なに、そろそろ決めようかと思ってな。その宣言だ。」

御堂は鳳凰を抜く。クロノとの模擬戦では初めての抜刀。左腕一本で構えている。

「それが君の切り札だったな。」

クロノも気合を込めてS2Uを御堂に向ける。

『私を抜いたからには負けは許さないわよ、御堂。』

「負けないさ。」

御堂がそう言うと、クロノに向かって突撃をかける。

「ブレイズキャノン。」

クロノが砲撃で迎撃する。

御堂はその砲撃に真正面から突っ込む。速くはない、しかし鋭い突撃は容易に砲撃の壁を突き抜ける。

もちろん、突き抜けた先には砲撃を放った直後の無防備なクロノがいる。

クロノは回避、防御共に不可能なタイミングであるにも関わらず、勝利を確信し笑みを浮かべる。

クロノのその顔を見て、御堂、鳳凰もまた勝利を確信する。

「鳳凰、頼む。」

「キャスト 諒解、マグネティック・シーフ 詠唱、磁力窃盗。」

瞬間、鳳凰は陰儀を発動させる。御堂の変換資質のひとつである電気、それを介した磁力が鳳凰の周りを巡る。

そして、この磁力はクロノの持つS2Uに作用する。

「うわっ、この。」

鳳凰に引き寄せられるS2Uを離さないように必死のクロノ。だが、結果論を言えばこれは失策だった。

S2Uに引きずられる形でクロノは鳳凰に近づく。そしてバランスを崩し、前方につんのめる。

そして、つんのめった先の空間、それが問題だった。

「しまった。」

クロノは気づくがもう遅い。前方の空間は御堂の突進に備えて設置してあったデイレイドバインド、その発動範囲。クロノは自らのバインドに捕まってしまった。

だが、自分の魔法である。解呪するのはたやすい。クロノは解呪しようとするが、

「エンチャントコンフィステイト 付加、押収。」

鳳凰の宣言。それと共に御堂は鳳凰をクロノを捉えているバインドに振り下ろす。

鳳凰がバインドに接触、その瞬間、クロノが驚きのあまり固まる。「解除できない…、自分の魔法なのに。」

「残念。そのバインド、コントロール 支配権は俺のものだ。」

そう言いながら御堂は右腕をクロノに突きつける。その手に握られているのは自動拳銃 獅炎。

それを見たクロノはこう呟いた。

「やはり、ブラフだったか。」

御堂は戦闘中にも関わらず、その言葉に反応し、軽口を叩く。

「口三味線と呼ぶこともあるな。」

だが、半分はずれだ。こいつの準備で右手を使えなかったのは本

当だったからな。」

そして溜め続けた手札を公開する。

「フオマルハウトより来たれ。」

御堂が唱えるのは必殺の呪文。

それにより、獅炎に変化が訪れる。獅炎の治まっていたホルスタールが解け、魔導書のページに戻る。それは獅炎を覆い、それと一体化する。

その変化と共に御堂は獅炎に右手に溜め込んだ膨大な魔力を注ぎ込む。否、獅炎が御堂から魔力を吸い上げる。

獅炎が限界まで魔力を吸い取ったのを確認すると、御堂はその引き金を引く。

「クトウグア、神獣形態。」

轟くのは御堂と鳳凰、二人の咆哮。そして、それに呼応するように放たれた弾丸が姿を変える。その姿は炎を纏った獅子、旧支配者クトウグア。

クロノは顕現したクトウグアに対して防御魔法を展開する。しかし、それはクトウグアが触れる前に、その咆哮で砕け散った。

すでにクトウグアを遮るものは何もない。それはクロノを焼き尽くすために突き進む。ちなみに付け加えておくと、御堂は非殺傷設定なんて知らない。要するにこのままではクロノは骨すら残らず焼失する。

もちろん、御堂も鳳凰も今後とも管理局と協力体勢を続けたい。

よって、クロノを焼き殺すつもりはない。なので、

「クトウグア、送還。」

クロノにクトウグアが食らい尽くされる前にクトウグアを送還する。

「勝負あり、でいいですよ？リンディさん。」

御堂はクトウグアの威容に触れてへたり込んでいるクロノを確認し、モニター室で見ているであろうリンディに声をかける。

「…ええ、お疲れ様、鳳さん。クロノもお疲れ様。それで話したい

ことがあるから、二人ともモニター室に…、それよりも先に怪我の治療ね。医務室で話しましょう。』

クトウグアが顕現したというのに正常に作動する訓練室のスピーカーの頑丈さに若干の驚きを感じながら、御堂はへたり込んでいるクロノに声をかけて医務室に向かう。

「それで、俺の処遇は決まりましたか？」

医務室で治療を受けた御堂はそう切り出した。

この模擬戦は御堂の所持するトンでもスキル、その安全性の確認という目的で行われたものだ。

この質問の答え次第では管理局に宣戦を布告するつもりで御堂は警戒を維持したまま問いかける。

「先ほどの模擬戦、鳳さんは銀鍵守護神機関を完全に制御できていたことを認めます。よって今後、管理局は無暗にあなたの持つ銀鍵守護神機関に干渉はしません。」

どうやら、目論見は成功したらしい。御堂と鳳凰にとっては最良の結果だ。

しかし、そううまくは運ばない。

「しかし、我々は残りの二つ、ネクロノミコンと劔冑『鳳凰』について確認できていません。」

リンディにそう言われた御堂。そこには「しまった」という表情が張り付いていた。しかし、それは演技であることがその場の全員が分かるほどに嘘っぽいものだった。

「すいません、完全に忘れてました。普段はよほどのことがないと装甲はしませんので。」

つまり、追い込まれているように見えてまだまだ余裕だった、御堂は言外にそう言っている。

『実際、装甲戦闘は仕手の負担が馬鹿にならないの。私の場合は特にね。だから、使わずに済むならそれに越したことはないわ。もし、使わせたければ私たちが切り札を切らざるをえない状況、少なくとも

も、そこで寝ている執務官より強い相手を用意することね。』

鳳凰はストレートに告げる。この程度の相手に切り札を切るのは勿体無い、そう言っているのだ。

「そっちだって結構、ボロボロじゃないか。」

鳳凰の言葉を受けてベッドからクロノの声が聞こえる。

「傷の見た目だけなら確かにお前より酷いわな。」

御堂が模擬戦中にクロノから食らった攻撃は砲撃が一発、ステインガーによるかすり傷がたくさん、といった具合である。

それに対してクロノがまともに食らったのは獅炎の加速撃ちのみだが、

「でも、実際はどう考えてもお前のほうが重症なんだから大人しくしてろ。」

クロノの砲撃と御堂の加速撃ちは威力が段違いだった。故に、御堂がピンピンしていてクロノがベッドで寝ているのだ。

「そういうことなんで、こちらの装甲戦闘を見たければそちらも相応のリスクを負う、もしくはこちらに相応のリターンを用意してくださいよ。」

リンディに告げる御堂。

「大体、あの程度の機材で私たちの装甲戦闘をモニターしても機材が爆せて記録なんて残らなかつたでしょうね。」

御堂の後を引き継ぐ鳳凰。これにはリンディが少し苦笑い。御堂と鳳凰は知らないが、モニター室の機材はクトウグアの顕現でいくらか壊れていた。余談になるが、ここにエイミィが同席していない理由はそれである。

「まあ、装甲に関してはおいおい、必要なときがあれば事前に連絡を入れますよ。もっとも、滅多なことがないとそもそも装甲しないし、そんな展開は世界の滅亡一歩手前と同義ですしね。」

御堂が、今までの装甲戦闘について語る。事実、今まで御堂が実戦で装甲したのは数えるほど、さらに最初の戦闘 鳳凰との出会い直後の偶発的な戦闘 を除けば、相手は世界を滅ぼしかねないよう

な人外のヤツラばかりである。

「ちよつと待て、そんなに危ない世界なのか？地球は。」

御堂の戦歴を聞き、驚くクロノ。

「そうでなければ、魔法工学研究局も特殊戦技教導隊も必要ないよ。」

あつさりと答える御堂。

『あなたは「現実」という名の薄皮に隔てられた向こう側を見たことがあるのかしら？』

世界は常に崩壊の危機に晒されている。私たちの戦いなんてそのほんの一部でしかないわ。』

これが鳳凰にとつての常識に日常。半年前の御堂にとつては非常識にして非日常。

『世界は変わらず慌しくも危険に満ちている。』と言ったところかしら。」

リンディが後を引き継ぐ。

「分かりました。あなた方が世界を守るために戦っているのはこちらでも理解できました。また、その戦いには力が必要なことも。よつて、あなた方の地球での活動において、我々管理局は何の制限も設けないことを約束します。」

リンディの言葉は鳳凰と御堂が望んだ最良の結果であった。

「それでは、改めて、よろしくお願いします。」

『お願いするわ。』

「こちらこそ。」

御堂とリンディが改めて協力体勢を確認する。

クロノも艦長決定ではどうしようもなく、また、模擬戦で御堂の実力と人柄を垣間見ているため、渋々といった様子で、

「これからはよろしく頼む。」

ベッドの上から声をかけてきた。

第四話「御堂流ブラフの使い方」（後書き）

スワンアサルトや、無限ヒバリのようなコンボ・コントロールが大好きな筆者の趣味全開でお送りしました。耐えて、溜めて一気に逆転って、やるほうは本当に楽しいんですね。

第五話「戦う理由、戦える理由」（前書き）

出張という名の転勤にもめげずようやく更新です（めげたから遅くなっただんじやないの？という突っ込みは勘弁してください）。

しかし、話がほとんど進んでいないのはどういことだろう？と、いつになったら完結するのか少々不安になっています。

第五話「戦う理由、戦える理由」

「いや、こっちが構えているのは前のターンの行動から分かるだろう。だから、それをケアするようにしないと。」

早朝、御堂の家では朝練が行われていた。ただし、魔方陣が展開されていたりはしない。代わりに元祖TCGで使うカードが散らばっている。

「御堂さん、それなら正解はこっちですか？」

「なのは。それよりも、こっちのほうがいいんじゃない？」

なのはとフェイトが生徒で、御堂が講師役だ。

『違うわよ、正解はこれ。』

鳳凰が正解を指し示す。

「うーん、なのはやフェイトの答えも悪くはない。ただ、最善は鳳凰の答えかな。」

御堂の答えに二人は少し意気を落とす。

「じゃあ、なんで鳳凰の答えが最善か分かるか？」

続けて二人に問う御堂。

「えーと。」

「うーん。」

考え込む二人。

御堂の家でフェイトとなのはが特訓をやっている理由、それは昨日まで遡る。

模擬戦終了後、医務室で簡単に今後の話をしたリンディ、クロノ、御堂、それとモニター室の機械の故障に何とか対処したエイミィは地球、正確には捜査本部に戻ってきた。エイミィの作業が思いのほか時間がかかってしまったため、予定よりも遅い帰還だ。

「それにしてもすごいねえ、鳳さんは。うちのクロノ君に勝っちゃうなんて。」

ハラオウン家に着くとエイミイは御堂に声をかけてきた。

「そりゃ、能力を聞いてから丸一日もあれば対策ぐらい思いつきますし、それに対応して練習する時間も取れましたから。それと、御堂でいいですよ。」

実際に御堂は火曜日丸一日、鳳凰と共に作戦会議を行った。そのときに想定される状況をいくつかピックアップし、対応のパターンを決めていた。銀鍵守護神機関が使えずにほぼ二ト状態の御堂にはそのための時間が十分にあった。

対してクロノは執務官という役職のため、忙しくその手の時間は御堂よりも少ない。というより、そんな暇はほぼ無かった。

御堂に言わせれば、今回の模擬戦の結果は準備時間の差を考えれば必然だった。

「それじゃあ、御堂君って呼ぶことにするよ。」

ここで、エイミイと御堂の会話が途切れる。理由は二人が得体の知らないプレッシャーを感じたからで、それはリンディから放たれていた。

「リンディさんも俺のことは御堂でいいですよ。」

プレッシャーに負けた御堂は少々怯えながら提案する。

その瞬間、プレッシャーが消えた。

「それでは、御堂さん、で。」

そこで玄関から声が聞こえてくる。

「ただいま。」

「お邪魔します。」

フェイトが帰ってきたらしい。声からしてなのはも一緒だ。

「クロノ君、御堂さん、模擬戦はどうでしたか？」

クロノと御堂の姿を確認したなのは挨拶もそこそこに模擬戦について聞いてくる。

その様子から、よっぽど気になっていたようだ。言葉には出さないがフェイトも相当気になっていたのかそわそわしている。

『もちろん、御堂が勝ったわよ。それに銀鍵守護神機関、劔冑の使

用に関しても安全性については認めてもらえてこちらにとっては万々歳の結果ね。』

そんな二人に対して鳳凰が結果を告げる。

「要するに、お前らとの共同戦線は継続ということだ。」
御堂がまとめる。

「これからは協力して事件の解決に挑むことになります。そこで協力がスムーズにできるように御堂さんにはあなたたち二人の戦闘映像を渡してあります。御堂さんの戦闘映像は今日の模擬戦の分しかありませんが二人とも見ておいて下さい。」

そう言いながらリンディはその場で御堂とクロノの模擬戦を記録したディスクを再生した。

そして、見終わったなのはとフェイトは同時に御堂に話しかけてきた。

「御堂さん、お願いがあります。」

二人が完全にシンクロしていることに若干引きつつ、御堂は二人の話を聞くことにした。

「ん、何だ？」

「御堂さんの戦い方を教えて欲しいんです。」
「またしても八モる二人。」

ぶつちやけると、御堂は女性、それも年下の少女にはかなり甘い。鳳凰に会う前、常識的な日常を送っていたころはとにかく妹の頼み事に弱かった。できることはなるべく叶えてあげていた。

そして今回の二人の頼み事は御堂にとっては簡単なことだった。

「よし、任せろ。」

即答で引き受けた。ただし、そんな御堂に鳳凰は若干不機嫌な様子だった。

そんな経緯で、現在、御堂の家では特訓の最中である。

もつとも、なのははリンカーコアが完全に回復しておらず、フェイトも含めて愛機が修理中のため、実戦形式の模擬戦などはできな

い。そこで、御堂は戦闘時に何を考えて行動するか、それを教えることにした。その教材が散らかっているTCGなのだ。

「はい、時間切れ。それでは答えは？」

二人があまりにも考え込んでいたので御堂が時間を切る。

だが、二人はまだ悩んでいる。仕方ないので御堂はヒントを出す。「しょうがないな。この場合、ケアしなければならぬ状況は何種類か？これがヒントだ。」

これで気づいたらしい。なのはとフェイトが相談を始める。

「私は『蛇の皮』をケアするためにこうすべきだと思ったんだけど

…。」

「なのは、でもそれだと『木霊の力』をケアできないよ。」

「あ!」「」

どうやら正解にたどり着いたらしい。

「鳳凰さんの答えだとどちらの場合でも対応できるから、ですよね。」

なのはが代表で答えを示す。そして御堂の返答は

「正解。」

こんな感じで朝練は続く。

「御堂さん、少しいいですか？」

なのはが質問してくる。

「ん、何か納得できないことでもあったか？」

「いえ、御堂さんの教え方は分かりやすく、この練習の意味も分かるんですけど…。」

はて、それでは何があるのだろうか？

それを知るため、なのはに続きを言うように目で促す。

「御堂さんはここで一人暮らしなんですよね？」

「ああ、そのことか。」

家に招待したときからこの質問をされることは予想していた。だから冗談めかしてこう答える。

「残念ながら、優雅な独身貴族じゃないよ。口うるさい同居人がいるからな。」

そう言いながら鳳凰を示す。

『うるさいだけで、生活費も何もかからないんだからそこの居候よりもよっぽどいい同居人だと自負してるけど。』

鳳凰も同じように冗談めかして返してくれる。

だが、なのはが聞きたいことはそう言うことじゃないだろう。

「そうじゃなくて、家族とかそう言う話を聞きたいんですけど。」

案の定、そんな言葉が返ってきた。話せない話ではないが今は話したくない。だからこう答える。

「話してやつてもいいが、そうすると遅刻するぞ。」

言いながら現在の時刻を示してやる。現在は朝の6時50分。事前になのはから希望のあった終了時刻、6時45分から5分ほどオーバーだ。

「それになにやらフェイトも聞きたいことがありそうだしな。」

フェイトもさつきから質問のタイミングを計っていたらしく、こちらの様子を伺っている。

「今日は二人とも放課後は空いてるんだろ？」

その問いに二人とも頷く。

「なら、放課後に来いよ。話してやるから。」

それでその日の朝練は終了した。

『御堂、本当に話すの？あの彼女たちにあなたの過去を。』

二人を送り出してから鳳凰が聞いてくる。

「話すさ、約束しちまったしな。」

若干、あいつらには刺激が強いかも知れないが、と苦笑を付け加えながら、それでもはつきりと言いつつ切った。

『まったく、そんな辛そうな顔で言う台詞じゃないわよ。』

かっこよく決めるつもりだったのに、鳳凰にそんなことを言われた。

「分かってるよ。」

表情に辛いものが出ているのは自覚している。昔からこういった事はすぐ顔に出る。

「それでも話す。そう約束したから。だから改めてお前に宣言したんだ。これでもう後には引けないしな。」

『基本は柔軟なくせに時々変なところで頑固よね、御堂は。それで結構損してるでしょ。』

表面上は苦笑交じりの鳳凰。でも、半年以上の間共に死線をくぐってきた相棒のことだ。本当はとても心配してくれている。

だから、極力明るく応じる。そんなことをしても本心は鳳凰にモロバレだろうが、まあ、意地だ。

「三つ子の魂、百まで。というやつだ。それに基本はぐうたらだからな、自分で自分を縛らないと楽なほうに逃げちまうのが分かるんだ。」

そう言いながら、台所へと足を運ぶ。

「さあ、その話は終わりだ。今日から魔力復活で忙しくなるんだ。さっさと朝飯食べて準備しようぜ。」

『そうね、そうしましょ。』

やっぱり、楽な方に逃げてるよな。正面からその話をする辛くなるから、逃げちまった。

そう思いながら食パンをトースターに放り込んで、お湯を沸かし始める。

「それじゃ、よろしく。」

現在御堂はハラウン家を訪ねていた。目的は個人による次元間の転送のやり方を学ぶためである。

「本当は不本意なんだがな。」

講師はクロノである。ただ、その台詞通りに不機嫌そのものであるが。

「そう言うなよ。敵は単独での次元移動ができるんだ。こっちもで

きないとさすがに厳しい。」

御堂は個人での次元移動手段を「一応」持っている。しかし、問題がありすぎて使用不可なのだ。だから、こうして比較的安全そうなミッド式を使いたいのだ。

「確かに、艦長からも協力するように言われているし、独学で事故でも起こされたら厄介だからな。」

それでも、しつこいぐらいに渋々感を出しているが。

「ぐだぐだ言っても仕方ないから、はじめようぜ。」

そう言って、御堂はクロノを促してようやく始まることになった。

「なんかもう、馬鹿らしくなってきた。」

その日の昼過ぎにそう漏らしたのはクロノ。

「クロノ、どうだ？ちゃんと転移できてたか？」

モニターには、クロノの指定した世界に無事に転移した御堂が移っている。

「大丈夫だ、こっちで航跡も追っていたが何も問題無かった。」

こんな短時間で修得した君の存在自体が問題だろ、と心の中で付け加えておく。

「それじゃあ、戻ってきてくれ。」

クロノはそう言いながらあの模擬戦で戦ったのがとんでもない化け物であったことを改めて認識した。

『案外、あっさりできたわね。』

「確かにな。もっとも、最初はどうなるかと思っただけだな。」

現在、鳳凰と御堂がいるのは山岳地帯。

午前中にクロノから次元転移の基礎理論と法制関係の講習を受けた御堂と鳳凰。午後に入ってからクロノ同伴でいくつかの世界を回って感覚をつかんだ後、改めて、ミッド式を習おうとしたのだが、「原理はわかったんだけどな。」

どうやら、御堂はミッド式に対する適正がないらしく、いくらや

つてもまるでうまくいかなかった。

そこで自分たちのもつとも得意とする形、五芒星を用いたものへと調整している。ただ、その代償として、発動にかかる時間が純正のミッド式よりも劣っている。

「それじゃあ戻るとするか。」

そう言う御堂は鳳凰を構える。

『キャスト スベル・ジャック 諒解。詠唱、呪文乗っとり。』

御堂の足元に展開する五芒星。そこから、湧き出るように展開するミッド式の魔法陣。それはミッド式の次元転移の術式。それが展開すると五芒星は消えた。

『キャスト ツインキャスト 続いていくわよ。詠唱、双術。』

さらに五芒星がひとつ展開する。

しかし、その五芒星も展開と同時にミッド式の次元転移の術式に変化する。

『キャスト 最後の仕上げ。詠唱。』

最後にもうひとつ、五芒星が追加される。そして、先に展開したミッド式の魔法陣がその五芒星に吸い込まれ、結局、双術が変化した次元転移の術式だけが残る。

「しかし、まどろっこしいな、流石に。結構、魔力消費もでかいし。」

「ぼやく御堂。確かに呪文を唱えること3回、魔力消費も稲妻の8倍。ぼやきたくもなる。」

『御堂がミッド式を自前で使えないからでしょ。それに「門」を開くよりマシでしょうに。』

「確かにそうなんだけど……。」

鳳凰の言葉に同意しつつも、しかし、御堂は不満げに愚痴ろつとする。しかし、それは突然感じた敵意によって止まる。

「鳳凰？」

『無理ね、間に合わない。中断するわよ。』

「くそ、また始めからか。面倒臭い、な！」

御堂は言い終えると同時に地面を蹴りその場から離脱する。

「武装開放。」

跳躍の最中に獅炎と竜氷を展開し、本能に従い即座に発砲する。

そして、一見何もないところに突き進み、虚空に着弾する。

「キシヤアア。」

瞬間、雄叫びが上がり、何もないはずの空間から滲み出るように

「それ」が姿を表す。

「それ」は例えるなら赤い鱗を纏った巨鳥。

そして、御堂の弾丸が当たったと思われる腹の部分はその鱗が剥がれていた。

「防御はそこまで硬くないみたいだな。」

抜き打ちで放ったため、先の弾丸には魔力をほとんど込めていない。それでも鱗を剥がす事が出来たのだ。キチンと魔力を込めてやれば問題なくぶち抜ける。

「それよりも問題は……」

「分かってる。あの光学迷彩ステルスだろ。それでも気配は捉えられる。少々やり難いがそれだけだ。」

そう言いながら、御堂は巨鳥に向かい駆けて行く。

勿論、両の手の獅炎と竜氷を発砲しながらである。

「それに、こつやって間断なく攻撃を叩き込めば光学迷彩が使われる前に倒せるぞ。」

御堂の言葉通りに、着弾した場所から次々に鱗が剥がれ落ちていく。

「そろそろ、終わりだ。」

右の獅炎で発砲を続けながら左の竜氷を後ろに引く。

そして、

「必殺、加速撃ち。」

竜氷を突き出すと同時に発砲。拳の速度が上乘せされた銃弾は音速突破による衝撃波を撒き散らしながら突き進み、巨鳥の左翼を消し飛ばす。

自分の片翼を吹き飛ばされた巨鳥はバランスを完全に崩す。勿論、御堂と鳳凰はその隙を逃さない。

『エンチャントガルバニック・アーク
付加、感電の弧炎。』

御堂は雷を纏う鳳凰で巨鳥の残った右翼を溶断する。

これにより、巨鳥は地面にその身を横たえる。

「さて、これでチェックメイトだ。」

『礼儀として聞いておいてあげる。何か言い残すことはあるかしら？』

獅炎の銃口を突きつけ問う御堂と鳳凰。もちろん巨鳥が答えることはない。

『次があれば襲う相手を選びなさい。』

そして御堂は引き金を引いた。

「それでクロノ、俺はこの世界にあんなのが存在するなんて聞いてなかったぞ。」

クロノに通信を繋いで事の説明をする御堂。

『聞かれてなかったからな。答えなかった。』

しれっと答えるクロノ。この態度に御堂はキレかけるが、

『というのは冗談だ。』

にやり、そんな感じで笑うクロノに御堂の怒りはしほむ。

「まったく、性質が悪い。」

からかわれた形の御堂だが、笑って流す。

『それで実際のところだが…。』

どうやら、この巨鳥はこの世界の固有の種らしく、管理局でも生息地や生態は把握はしている。ただ、今回の転移の指定ポイントは生息地から大きく離れており、遭遇することはまずないはずだった。

「つまり、なにか奴等が住処を追われる原因があると。」

『そう言うことになる。すまないが調査を頼んでもいいか？』

これに苦笑する御堂。

「立ってるものは何でも使え、例え客でも構わず使え。ってか？そ

れはミレニアムの十八番だよ。まあ、快くその依頼は受けるがな。」「助かる。それでは、そいつの生息地と詳しい生態のデータを送る。何かあればまた連絡を。」「

「諒解。」「

通信が終わる。

「さて、奴等の生息地と生態は、と。」「

送られてきたデータを読んでいく御堂と鳳凰。だが、読み進めていくうちに表情が引きつっていく。

『まずいわよね、それもかなり。』

「ああ、例えて言うなら、M O M a の存在をまるで知らずに、ローマにボードコントロールを持ち込んだぐらいにまずい。」「

『大袈裟過ぎる上に分かりにくいわよ、それ。』

「ともかく、そんなことを言ってる場合じゃないな。」「

そう言つと御堂は伏せる。瞬間、髪の毛が何本か持っついていかれる。「くそ。見えたか?」「

『無理ね。さつきとは質がまるで違うもの。それに私も感覚がやられてる。』

先ほど、資料にあった巨鳥の生態にはこう書かれていた。

『この巨鳥は狩りを行うとき、常に二羽^{ロツテ}一組で行動する。相手が格上の場合には弱いほうの一匹が犠牲になり、鱗と血に含まれる一種の麻酔で、対象の五感を鈍らせ、残りの一匹が止めを刺す。これに対処するには遠距離から火制することが望ましいが、高度な迷彩魔法を使用するため、困難である。そのため、この巨鳥と遭遇する可能性がある場合はあらかじめバリアジャケットの設定を防毒仕様に変更しておくことが望ましい。』

近接戦闘をやらかした御堂は思いつきり毒を吸い込んでいた。おまけにどういう理屈かは不明だが鳳凰も影響を受けている。相手の姿が捉えられず、さらに高度差も劣勢。こうなると取れる手段が限られてくる。

そう、限られてくる、ただそれだけのことである。手段がないわ

けではない。そして、その中で一番簡単なものを実行する御堂。

「相手の場所が分からないなら、丸ごと吹き飛ばす。やるぞ。」

「諒解。ボルガニック・フョーラルアウト火山の流弾。」

瞬間、天より降り注ぐのはマグマを纏う岩石。それは避ける余地の無い密度で範囲内の全てを襲う。

もちろん御堂も例外ではなく、しかし、防御も回避もしない。ダメージを食らいながら、敵が炙りだされるその瞬間をひたすら待ち続ける。

ついに、その瞬間が訪れる。流弾が何も無いところで碎けて爆ぜた。

「見つけた。」

「一撃でやるわよ。キャスト詠唱、…」

「ラケーテン…」

「『え?』」

突如響く自分たち以外の声にあっけにとられる御堂と鳳凰。

そんな二人に構わず、突然の乱入者は技を放つ。

「ハンマアアア!」

突起付きの鎚が、ロケットの推進力を借りて巨鳥に叩き込まれた。そして、巨鳥からリンカーコアが出てくる。

そして、巨鳥のリンカーコアを確保する。

「ひと組取り逃がして諦めてたけど、そのうち一匹が見つかるなんてラッキーだったな。」

そのまま乱入者は離脱しようとするが、

「キャスト詠唱、アイス氷。」

そうは問屋が、否、御堂と鳳凰が卸さない。

それを受けて乱入者の両足が凍り、動きが鈍る。だがその拘束は簡単に破られる。

そして、その隙に御堂と鳳凰は乱入者に追いつく。

「すぐに逃げるなんて、釣れないな。ヴィータ。」

赤い服に特徴的なウサギがあしらわれた帽子。手には鉄槌を持つロリッ娘。見間違うはずもない、ヴォルケンリッターのヴィータである。

「なんだ？また邪魔すんのか？今度は容赦しねえぞ。」

空中でにらみ合う両者。もっとも睨んでいるのはヴィータだけではない。

「そうだな、条件次第では協力してやってもいいぞ。」

「は？おまえ管理局の手先だろ？」

今度はヴィータがあっけにとられる番だった。

「確かに、今は管理局と協力している。だが、条件次第では管理局を裏切つて、お前らに協力してやってもいい、って言ってるんだ。なんなら、死なない程度にもう一回蒐集してくれても構わんぞ。」

闇の書の収集は、魔導師一人につき一回までなので御堂の提案は不可能なのだが、御堂はそんなこと知らない。

そして、ヴィータはその点を指摘しつつ、御堂の提案を拒絶する。「あたしらは騎士だ。交渉なんてごちゃごちゃしたことをする気はねえ。」

それに、蒐集できるのは一人一回までだ。そんなことも知らねーのか、タアコ。」

鉄槌を突き付けながら歳相応(?)の憎まれ口を叩くヴィータ。

「そー言うわけで、もうあたしたちはお前に興味はねえ。あたしも蒐集で忙しいからな、邪魔しないなら見逃してやる。」

完全に見下されている御堂。

「確かに、前回のときはお前とシグナムの二人がかりとはいえ完全に負けたし、今の俺は万全の態勢とは言えないがな。」

先ほどの巨鳥との戦闘でダメージを負っているぶっっちゃダメージの大半は自らの放った「火山の流弾」によるものだが、御堂はここで言葉を切り、不敵な笑みを浮かべる。

「こちらは戦闘してでも用があるからわざわざ足止めしたんだ。すまんが付き合ってもらうぞ。」

そう言った御堂は鳳凰を構える。

『ひとつ忠告してあげるわ。舐めてると一瞬で終わるわよ。』
「上等だ。」

鳳凰の挑発にヴィータが答え、グラーフアイゼンを構え…。

『キャスト、アクセルレイト、
詠唱、加速。』

終わる前に御堂の姿がヴィータの視界から消える。

「な!？」

御堂は驚くヴィータの背後をとる。

「鳳凰が忠告してくれただろう。『一瞬で終わる』と。」

鳳凰を振りかぶる。

『キャスト、ライトニング・ボルト
詠唱、稲妻。』

稲妻がヴィータを撃つ。

通常、普通の人間はそれだけでしばらく戦闘不能になるが、バリ
アジャケットのせいなのか、元が頑丈なのかはわからないが、それ
で終わらないのは前回の戦闘で判明している。

『キャスト、ラーバ・スパイク
詠唱、溶岩の打ち込み。』

サスヘンド、リフト、ライトニング
待機、裂け目の稲妻』

御堂は陰儀を用いて自分の熱量が許す限りの攻撃呪文を間断なく
叩き込み、不意打ちでもぎとった先手の利が失われないうちに攻め
立てる。

もちろんヴィータも黙って攻撃を受けているわけではない。手に
した愛機、グラーフアイゼンで防いでいくがそれでも御堂の手数の
ほうが圧倒的に多い。

故にヴィータには反撃の機会なんてまるで無く、主導権は御堂が
握っている状況になる。

しかし、御堂もまた苦しい。思った以上にヴィータに攻撃を捌か
れているのだ。今回、ヴィータと戦うにあたり御堂が採用した戦術
は最序盤からの火力連打。これは最初からすべての資源を^{リソース}つぎ込ん
で攻め立て、資源が尽きるまでに決まれば勝ち、耐えきらればガ
ス欠で負けというとてもわかりやすい戦術である。要するに御堂は

自らの資源リソースを使い切るまえにヴィータをKOする必要がある。だがこの調子で捌かれては御堂の資源リソースが先に尽きる。そういう意味では御堂もまた追い込まれている。

特に深刻なのは、

『御堂、熱量フリス限界まで間がないわよ。』

そう、そろそろ御堂の熱量は底を突く。魔力に関しては銀鍵守護神機関のおかげで問題ないが、魔力を攻撃に注ぎ込んでいるせいで熱量の補充まで手が回っていないのだ。御堂も鳳凰もこうなる危険性を承知でこの戦術を採っていたのだが、状況は想定していたより遙かにまずい。

「あと少しだ。間に合わせる。」

ヴィータもかなりのダメージを負っている。騎士甲冑はすでに原形がわからないうらいに弾け飛び、そのきれいな肌にくつつもの火傷をつくっている。

『諒解。キャスト 詠唱、ファイアブラスト 火炎波。』

バーン戦略における最終兵器を切った御堂。溜めなく放たれた極大威力の火炎はヴィータを飲み込む。

「頼むから立ってくれるなよ。」

今で御堂の熱量はスツカラカン。特に火炎波は威力の割に溜めなく放てる代償として熱量を一気に奪う諸刃の剣。

『残念ながら失敗みたい。立ってるわよ、あの娘。』

鳳凰の言うとおり、ヴィータは立っている。騎士甲冑は完全に崩壊し、アンダージャケットがかるうじて残っている状態にも関わらず彼女の眼には戦意が残っていた。

「だが、あと一撃かませば落ちる。」

『問題はそれを通せる状況が作れるか、否か、ね。』

「作るさ、何としても。」

そう言いながら御堂は飛行に使う分を除いた全ての魔力を熱量の回復にまわす。しかし、それより先にヴィータが動く。

「アイゼン、カートリッジロード。」

『Explosion.』

グラーファイゼンの柄がスライドしカートリッジを一発ロード、スパイクと噴射口のあるラケーテンフォームへと変形する。

「ラケーテン、ハンマアア！」

そのまま御堂に突撃をかける。

御堂はこの突撃を鳳凰で流しにかかるが、現状、熱量の回復にはとんどの魔力を振っており、魔力放出による身体強化を十分に行えない。そのため、直撃は避けたものの大きく姿勢を崩される。そこへ一回転したラケーテンハンマーが再び襲いかかる。

「吹き飛ばええ！」

直撃。完全に御堂の左わき腹に突き刺さりそのまま振り回し吹き飛ばす。

御堂は防御できずに、否、防御をせずにされるがままに吹き飛ばぶ痛みに顔を歪め吹き飛びながら、それでも御堂は鳳凰への指示を出す。

「タイミング外したら叩き折るぞ。」

『心配ご無用。御堂が体を張って回復した熱量、絶対無駄にしない。』

『そう、御堂は自分のダメージと引き換えに熱量を回復したのだ。』

キャスト
ライトニング・ボルト
詠唱、稲妻。』

稲妻がヴィータに走る。しかし、それはグラーファイゼンの一振りで防がれる。

そもそも、フルバーン戦略は相手の態勢が整っていない、もしくは崩しているときに魔力消費対ダメージの効率が高い呪文を連打することで真価を発揮する戦略なのだ。故に態勢の整ったヴィータ相手に単発の攻撃呪文が通るはずがない。

そう、単発ならば通らないのだ。

ではたたみ掛ければ？やりようによっては通る。

そして、御堂と鳳凰はそれを証明して見せる。

キャスト
タンゲル・ワイヤ
設置、からみつく鉄線。』

稲妻を防ぐためにグラールファイゼンを振り切られた瞬間に鉄線が
ヴィータを絡め捕る。

「バインド！？でもこれぐらいなら！」

ヴィータは鉄線から抜け出そうともがくが、抜け出せない。ならば、と、ヴィータは自身のパワーに任せて鉄線に絡みつかれた状態で無理矢理に戦闘機動を取る。

だが、多少動かれる事も想定のうち。いや、無理に動かこうとしたヴィータには隙ができていたことを考えると想定以上の有利ですらある。一時的な足止めの役割りは十二分に果たした。

そして、あとはからみつく鉄線を餌にして呪文を唱えるだけだ。

『終わりよ。詠唱、爆片波。』

キャスト シャーフネル・ブリスト

鉄線が爆発する。ヴィータを絡め取った状態で、だ。

さすがのヴィータも無事で済むはずがなく、むしろこれがとどめになり、意識を失い落ちていく。

「撃墜スコアー、追加だな。これでようやくエースに届いた。」

『そんなことより、早く体勢を整えなさい。墜ちるわよ。』

「わかってるよ。着陸タッチダウンの前にもう一仕事あるしな。」

御堂は体勢を整えると墜落中のヴィータに向かう。

『御堂？追撃する余裕も必要もないでしょ？』

「追撃じゃなくて助けるんだよ。流石にこのまま墜落されると後味が悪い。」

『相手がオッサンでも？』

「ケースバイケース。」

そこで漸くせむじなヴィータに追い付きお姫様だっこの形で抱き上げる。

「少しやり過ぎたな。」

抱き上げたヴィータを見て、瞬時に目を逸らした御堂が気まずそうに呟く。

確かにやり過ぎと言えはやり過ぎた。と言うより御堂の基準では完全にやり過ぎだ。

なんせ、ヴィータは体中火傷だらけ、傷だらけである。しかし、

何よりも御堂をあわてさせたのは、辛うじて残っていたはずのヴィータのアンダージャケットが完全に消失していたことだ。

要するに御堂は見てしまった。ちっちゃくてかわいいヴィータの裸を。そして、その腕にはヴィータの肌の感触が直に伝わっている。そして、気まずさと、決して熱量の使い過ぎだけではない寒気を感じながら、ゆっくりと着地する。

「すげえ寒い。」

うづくまり震えている御堂は青い顔でつぶやく。

『当然ね。』

答える鳳凰の声は冷たく、御堂をさらに震えさせる。

『上着を着ればマシなのに、あの娘に渡しちゃうんだから。』

無事に降りた御堂はヴィータを比較的平らな場所に寝かせて上着をかけたところで、意地と気力が底をついた。

「うるせえ。戦闘は終わったんだ。ならば『高らかにノーサイドの笛を吹く』のがミレニアムの流儀だろう。」

『もっとも、彼女はの性格を考えればGGグッドゲームとは言ってくれないでしょうけどね。』

「違うない。」

鳳凰の言葉からは刺と冷たさが消えていることに安堵する御堂。

「すまん、少し任せても大丈夫か？安心したら眠くなってきた。」

『何に安心したのか気になるけど…。って御堂？銀鍵守護神機関は？開いているのならとつくに熱量は回復してる筈よ？！眠くなるわけあるはず…。まさか！』

慌てる鳳凰はなかなか可愛い、既にまともに働いていない頭でそんな事を考える御堂。

「慌てるお前に惚れそうだな。」

思ってる事が口に出た。

『ちよつと、そんなこと言ってる場合じゃないでしょ。さっき直撃を受けた場所を見せなさい。』

鳳凰に言われるままに傷を見せる御堂。脇腹は穿たれていた。しかし、傷の程度に対して出血が圧倒的に少ない。

『成程、そこに魔力を取られてた訳ね。』

「あと、神経にも少しな。」

御堂の魔力変換資質のひとつである電気。先日の模擬戦で見せたようにそれは磁気と表裏一体である。その応用で（ある程度は）血流を制御できる。そして神経の伝達は電気信号による。ならばそれをコントロールできるなら痛覚を遮断することもまた可能。

『ただ、その状況で眠ると死ぬわよ。』

そう、緻密な魔力制御が可能という前提があればこそその前述の応急措置。寝てしまつてはそんなことできるはずもなく、出血多量で死に至る。

「それも含めて『任せる』と言つたんだが。」

『ああ、そう。御堂がすすすう気持ちよさそうに寝てる横で私に働かせるわけね。』

納得はしているが不満はある。そういった口調の鳳凰だが、御堂は意に介さず、さらに仕事を押し付ける。

「ついでに、これでクロノに連絡を取ってもらえると…、あれ？」

『自分は楽するのに私にはっかかり仕事を…。つて、御堂、私すごく嫌な予感がするんだけど気のせいよね？』

「気のせいだといいなあ。」

御堂は半分諦め声で返事しながら着ている服のポケットというポケットをまさぐる。しかし いや、この場合はやはり、が的確だろう、目的のものは見つからない。

「うん、クロノから渡された通信機がない。」

結局、御堂は二回りほど探してようやく結論付ける。

「と、いうことで俺は寝る。あとよろしく。」

『わかったわよ、まったく。その代わり、ちゃん回復しなさいよ。』
「諒解。」

こうして御堂は意識を手放した。

『ふう、流石に無茶のしすぎよ、御堂は。自分の体を何とも思っていないのかしら。』

御堂が夢の世界に旅立ったのを確認してから鳳凰が愚痴る。

御堂の戦略の基礎は半年前に鳳凰と出会った頃からまるで変わっていない。

曰く、

「ライフなんて飾りです。偉い人にはそれがわからんのです。」

今回もその格言通りに自分の体をぎりぎりまで削った勝利だ。

鳳凰は時々、思うことがある。御堂は自分の命が惜しくないのではないかと。

御堂は出会ったときからこの手の傾向はあるにはあった。おそらく、ゲームで培った感覚であろう。しかし、「実際」の戦場でもこの傾向は消えなかった。むしろますます強くなっていった。

『変わっているとは思ってたけど、ここまでとは予想できなかったわ。』

変わり者を仕手に選んだ鳳凰の気苦労とため息はは絶えることはない。

「それで、これはどういう状況だ？」

意識を取り戻したヴィータは起き上がり困惑気味にあたりを見回す。

自分は鳳御堂とか言う魔導師に墜とされたはずだ。だが、その墜とした張本人が隣で無防備に眠りこけているというのはどういうことなのか。しかも、自分にかけられている上着は先ほどまでヤツが着ていたものではなかったかと、言うよりそれ以外は考えられない。自分はこんなものもっていないし、何より決定的なのは、ラケーンフォームのスパイクで開けたと思われる見事な穴が腹部に開いていることだった。

『ようやくお目覚めね。気分はどう？』

御堂のそばに突き立つ刀が声をかけてきた。

「ん？あんたは？」

確か、鳳凰という名のデバイスだったはずだが、確認のため訪ねておく。

『銘は鳳凰。そこで無防備に眠りこけている鳳御堂を仕手とする、おそらく世界でもっとも気苦労とため息の絶えない劔胄よ。』

なんか、ものすごく苦労してるようだ。もっとも、嫌っているわけではなさそうだが。

「あたしは…。」

返答しようとするヴィータだが、鳳凰が遮る。

『自己紹介は御堂が起きてからにしない？』

あんまりにもあんまりな提案に怒りを通り越してヴィータは呆れる。

「何であたしが敵が起きるのを待たなきゃいけないんだ。」

『それもそうね。でも、御堂は敵を助けるような真似はしない。もうノーサイドの笛は吹かれてるのよ。』

「は？わけわかんねえ事言ってるじゃねえ。どう考えても敵じゃねえか。」

確かに、ヴィータの体には御堂との戦闘によるダメージ以外、具体的には気を失って地面にたたきつけられていればできたはずのダメージが一切ない。つまり助けられたことは疑う余地はない。だが、そもそも…。

『ということらしいわよ、御堂。』

ヴィータの思考を遮るように声が響く。ただ、その声はヴィータに向けられたものではなく、無防備に眠りこけているはずの人間に向けられてた。

「予想はしてたけどな。」

驚くヴィータ。その目に映るのは少々疲れ気味だがしっかりと立っている御堂の姿。

「な、お前、なんで？」

確かにラケーテンフォームのスパイクでわき腹を完全に抉った、いや、抉ってしまった感触はいまだヴィータの手に残っている。普通なら立てるはずが、まして、ヴィータを助ける余裕なんてあるわけがないほどの重症のはずだ。

「なんで？か。それは何を指してるんだ？お前を助けたことか？それともお前に叩き込まれた傷がすでに塞がっていることか？」

御堂は大穴を穿たれたはずのわき腹の様子を確かめながら応じる。「なに、真打の仕手ならばこれぐらいの傷はすぐに治る。もっともさすがに全快とはいかないけどな。まあ、その疑問はお互い様だろ？」

そう言つて御堂はヴィータに視線を向ける。御堂が叩き込んだはずの細かい傷や火傷はもう存在していない。そのきれいな肌に残っているのは比較的深めだったはずの傷跡のみだ。だがその傷跡も辛うじて見えるほどであり、この調子なら痕が残ることもないだろう。その事に御堂は胸をなでおろす。

だが、そんな御堂に冷や水をかける存在がいた。

『最近私も分かってきたんだけど、幼女の裸って本当にきれいでかわいいわよね。』

「っつ！」

全然分かつてなさそうな鳳凰の声が聞こえる。その言葉に御堂とヴィータは顔を真っ赤にして固まる。

一拍おいてから、御堂は視線を逸らし、ヴィータは手元にあった御堂の上着で体を隠す。

「ごめん。その、きれいな肌に傷が残つてるとすげえ後味悪いから、それで、確認してたというか、そのとにかくごめん。俺、ロリコンの気はあるけど今回はまったく下心とかなかったわけ。」

視線を逸らした状態でまくし立てる御堂。混乱の極みなのか微妙にまずい単語が混じっている。

「でもその、下心がないって言うのは、お子様だからまったく興味ありませんってことじゃなくて、やっぱり傷の具合が気になってた

だけで、むしろ俺ロリコンだからこんな出会い方じゃなくて普通に町であっていれば、一割ほどの下心ありでナンパしてるほど魅力的だからその、…。」

そして、見当はずれの方向のフォローを入れようとしてさらに危ない言葉を連発する負の螺旋スパイラルに陥っている御堂。

そんな御堂の言葉はますますヴィータの顔を熱くさせる。それとは反対にどんどん冷たくなるのは鳳凰の視線だ。御堂は混乱していて気がつかない。

そして、ついにヴィータは臨界点に到達した。

「テートリヒ・シュラーケ！」

ヴィータはグラーファイゼン・ハンマーフォームで御堂の後頭部を殴る。ヴィータから視線を逸らしていた御堂に避けられるはずもなく、見事に直撃。あっさり昏倒した。

「はあはあ…。」

殴ったヴィータの息はまだ荒い。よっぽど恥ずかしかったのだろう。

『とりあえずありがとう、御堂の暴走を止めてくれて。』

鳳凰は礼を言う。あの調子で続くようなら、鳳凰自身が御堂の魔力と熱量を借用して陰儀を叩き込む予定だった。それが節約できただけでもお礼を言う価値はある。

「いや、礼はいいけどよ、結局こいつ何なんだ？」

戦闘においてヴィータを墜とすほどの実力を見せたかと思えば、セクハラまがいの発言やロリコンをカミングアウト、最も理解できないのは余裕のない状態ですら敵を助けるその行為。もっとも、ヴィータがロリっ娘だったから助けたというのも否定はできないが。『何なんだ？と聞かれれば、私の仕手、としか答えられないけど。あと、器用そうでその実不器用。無鉄砲に戦闘しているように見えて、実は計算済み。そして、変態ロリコンのようでは実は紳士。そんなところかしら。まあ、悪人じゃないのは確かね。』

鳳凰も若干ため息交じりで答える。

『だから、かしら？御堂がどんな無茶をしようとしても付き合いたくなるのよ。』

少し苦笑気味に続ける。

「それで条件つてなんだ？」

ヴィータが一転ブスツとした声で尋ねる。

『え？』

不意を衝かれた鳳凰は呆けた声を上げる。

「最初に言つてただろ？」条件次第では協力する。『その条件を聞いてんだ。』

実を言つと、御堂と鳳凰は最初に交渉が決裂した時点で拘束後の尋問を考えていた。それがこつもあつさり心変わりというのとはどういふことなのか？鳳凰はヴィータの真意を確かめるために会話を繋ぐ。

『急にどういった心境の変化？』

「別に、あんたたちなら信用できそうだったから。それだけだ。それより早く条件とやらを話せよ。」

そう言われてまだ追求するのは野暮なヤツのことだろう。そして、鳳凰は野暮なヤツではなかった。

『こちらの用件は簡潔よ。私たちが知りたいのはあなたたちの目的、それだけよ。』

「は？そんなの決まつてるじゃねえか。闇の書の…。」

『闇の書の完成、それは聞くまでもない事。私達が聞きたいのはその先。完成した闇の書を使って何をするのか？つてこと。』

ヴィータを遮る鳳凰。

『管理局側から闇の書は危険な古代遺産だと聞いている。場合によっては世界を滅ぼすことも可能だと。あなたたちの主はそうまでして何を望んでいるの？』

どれだけとんでもない古代遺産であろうとも所詮は道具。それ単体では何もできない無垢なる存在。

故に何かをするためには必ず意志が介在する。

「はや、あたしらの主は何も知らない。あたしたちが勝手にやってるだけだ。」

だが、闇の書の蒐集は彼女達の主の意志ではないと言う。

『ふう、質問を変えましょう。あなたたちは何を望んでいるの？』

ならば、彼女達自身に闇の書に託す願いがあり、そのために独断で闇の書の蒐集している、そう考えるのが妥当。だからこそ鳳凰は質問を変えた。

それにヴィータは口を閉ざす。

『言いたくないなら言わなくてもかまわない。でも言ってくれないと助けられない。伝えてくれないと協力できない。』

言わなくてもかまわない、といっている割に鳳凰の言葉には真剣味が滲んでいる。そこにヴィータは疑問を感じた。

「なあ、闇の書が世界を滅ぼす力があることも分かってるんだろ。なんで協力しようとしてくれるんだ？」

世界を守ることに、自分の命を守ることを第一に考えるのなら協力なんて言葉はありえない。だからこそその疑問。

『そうね、私はあまり協力したくないわね。むしろ、世界を滅ぼすような力は根元から断つべきだと考えてるわ。でも、それじゃあ嫌だって、後味が悪いってだだをこねる人間がいるのよ。鳳御堂って名前なんだけどね。』

「なるほど、こいつならそうかもしんねえ。」

ヴィータは深く納得する。

『納得してくれたところで、そろそろ答えてくれないかしら。』

だが、まだヴィータは渋る。しかし、意を決したように口を開く。「あたし達の主を、はやてを助けたいんだ。」

ヴィータは話した。彼女達の主、八神はやてを蝕む闇の書の呪いのこと。その解決策として闇の書の完成を目指していること。

『…。』

ヴィータの話を聞き終えた鳳凰は沈黙のまま。

それが、ヴィータの不安を掻き立てる。やっぱり、失敗だったか

? ヴィータがそう考えたときだった。鳳凰が言葉を発する。

『御堂ならば確実に協力してくれるでしょうね。今の話が本当なら、という条件付きで、ね。』

鳳凰の返答は疑惑に満ちていた。だが、それはヴィータを疑っているのではなく、闇の書の効力そのものに対する疑惑。

だが、ヴィータはそうとは気づかない。

「何だよ、疑ってるのか！」

こいつらなら信頼できる、そう決心して話したヴィータにしてみれば心外どころの騒ぎではないだろう。

『そうね、疑っているわ。闇の書で本当にそのはやてって娘を助けられるかどうかを、ね。』

だが、鳳凰の返答はひとつほど上の次元の話だった。

「なんでだよ。なにか助けられない根拠でもあるのかよ！」

ヴィータは必死になって反論する。まるで、自分にも言い聞かせるように、自分にも信じ込ませるように。

『助けられない根拠はないわね。ただ、助けられる根拠もないのもまた事実でしょう。』

対照的に冷静な鳳凰。さらに続ける。

『まあ、実際にそんな状況だからね。私の抱いた疑惑、その根拠を強いて言うならただの直感に近いわ。もともと、仕手の道具に過ぎない劔冑が直感なんておかしな話だけどね。』

後半は自嘲気味に話すが、ヴィータの耳には届いていない。ヴィータはそれぞれどころじゃなく、自分達の行動 闇の書の蒐集 に対する疑念を押さえ込むのに必死だった。

そんな状況では話が進まないのだから鳳凰はヴィータに声をかける。

『とりあえず、今の話は私と御堂だけで留めておくわ。それに…。』

『おい、御堂。応答しろ。定期連絡ぐらいいはちゃんと入れる。おい、御堂聞いているのか？画像通信が調子が悪くてそっちの状況がまるで分からないんだ。早く応答しろ。』

ヴィータの着ている上着から聞こえてくる通信機越しのクロノの

声。

ヴィータと鳳凰の間に緊張とそれによる沈黙が走る。もともと鳳凰の内心は呆れも混じってはいた。

『こちら、鳳凰。聞こえている、クロノ執務官？』

だが、一瞬の思案の末、鳳凰はそれを破り応答する。

『鳳凰か？御堂はどうした？』

『御堂なら、現在昏倒中よ。例の鳥の調査中に闇の書の騎士に襲われてね。ただ残念ながら事件に特に進展はなし。その騎士にも逃げられたわ。と、言うことで早く救援を寄越してくれる？』

『ああ、諒解した。すぐに送るから待っていてくれ。』

『お願いね。』

それで通信を閉じる鳳凰。

『まあ、そう言うわけだから救援がこないうちに離脱しなさい。』

ヴィータに離脱を促す鳳凰。

『礼は言わないからな。』

鳳凰はツンケンした態度のヴィータに少し苦笑、そしてまじめな声に戻り告げる。

『感謝は結構。それと取り急ぎ、私と御堂のこれからの方針について話しておくわ。おそらく私達は闇の書の効果がはつきりするまで管理局とあなた達双方に肩入れすることになる。だから、もし戦場で会うことがあってもあからさまな援護はしないからそのつもりで。』

『邪魔さえしなければなんだっていいさ。』

そう言ってヴィータは騎士甲冑を再構築し、上着を昏倒している御堂に返すと転移の準備をする。

『次に会うときはできれば戦場でないところがいいわね。』

去り行くヴィータに鳳凰は別れの言葉をかける。

『ありえねえよ。』

だが、返ってきたのは否定の言葉。そうしてヴィータはこの次元から離脱した。

第五話「戦う理由、戦える理由」（後書き）

今回は前振りだけして終わった御堂の昔話ですが、ちゃんと次回でやりますので乞うご期待（もつとも、半分以上鬱展開になる予定ですが）。

それと、御堂の次元転移の方法がかなり複雑怪奇になっていますが、MTGチックにしようとするスタックまで絡めたこの方法しか考えつかなかったのです（ちなみにこれはハウリングオウルの「摘出返し」をヒントにしています）。

では、また次回にお会いしましょう。

第六話「戦える理由、戦う理由」(前書き)

ほとんど御堂の回想になっています。あれ、なのは達はどこに行
ったんだろっ？

第六話「戦える理由、戦う理由」

赤、朱、紅。

目に映るもの全てが赤に染まっていた。周りの景色も、銀であるはずの劔胄も、その刃も、全てが赤く、朱く、紅かった。原因？目の前にある。筋が通る、誰もが納得できる原因が目の前にある。

(レッドアウト?)

鳳御堂は目の前にあるそれを否定したくて、ひとつの仮説を立てる。

レッドアウト。それは過大なマイナスGにより血液が眼球に集中、視界が赤く染まる現象を指す。

だが、現状の御堂にそれが当てはまるかと言えば、少々無理があった。確かに御堂の視界は赤一色であり、その意味ではレッドアウトを疑っても良かった。だが、もうひとつの条件、過大なマイナスGがかかる、を御堂は満たしていない。今回は敵に飛行能力がなかったため、戦闘のほとんどは二次元機動だった。そんな動作で過大なマイナスGがかかるはずがない。

そもそも装甲した御堂は、劔胄の護りのおかげでそれこそ20Gや30Gといった、べらぼうなGがかからない限りブラックアウトやレッドアウトのような現象とは無縁である。

以上の理由により、御堂は自らの立てた仮説を否定する。自分が案外冷静にもものを見ることが出来ていることに苦笑しながら。

では、なぜ視界が赤く染まっているのか。見えるもの全てが紅く見えるのか。目の前に納得できる理由はあるのだが、それを認めたくない御堂は全力で他の可能性を探す。

周りの景色が朱いのは今が夕焼け、俗に言う逢魔刻おっまがときだから。だが、白銀の装甲を染めているのは夕日と言うには鮮紅に過ぎる。

結局、目の前の光景を否定することに行き詰る御堂。そんな時、ふと、御堂は自らの嗅覚に訴えかけるものを感じる。

御堂の好きな匂い。工作機械で鉄を削っているときと同じような匂い。だが、それは鉄を削る匂いとは似て非なるもの。

血の匂いだった。

目が覚めた御堂の視界に飛び込んできたのはいつかどこかで見たことのある天井。それもつい最近に見た記憶がある、白い天井。

そのまま天井を眺め続けるのはあまりにも無益なため、御堂は体を起こす。そして、きよろきよろと周りを見渡し現状把握に努める。

「まさか、こんな短期間で二回も世話になるとは思わなかった。」
現状を把握した御堂は少々自己嫌悪に陥る。

ここは時空管理局本局の医療区画、その一室。御堂は現状をそう把握した。利用する羽目になったのは二回目だが、前回利用したときから一週間も経っていない。勘違いということはないだろう。

『墜とされて自己嫌悪に陥る気持ちも分かるけど、後にしてくれない？伝えたいことがあるの。』

傍らの鳳凰が告げる。

「うん？何かあったのか？」

自己嫌悪を切り上げて鳳凰を見る御堂。それを確認すると鳳凰は御堂が気絶した後のヴィータとのやり取りを話す。

「なあ、鳳凰。世の中なんでこんなに悪い予感ばかりが当たるんだろうな。」

これが鳳凰の説明を聞いた御堂の第一声だった。その声は低く、押し殺していて、でも押し殺しきれなくて、若干の震えが混じっていた。

そんな予感があった。最初の遭遇戦のとき、シグナムと互いの武器を打ち合わせたときからなんとなく感じていたことだ。

単純に戦って倒すだけじゃ事件は解決しない。恐らく後味の悪い思

いしかしない。

ハッピーエンドに辿り着けない。

今までは『予感』であった。だが、今からは『事実』としてそれを突き付けられる。

悔しかった。だからこそ声が震える。自らの拳を力の限り握り締めてもなお震える。

『それが「武」の本質だと分かっているのでしょうか。それともこの半年で何も学んでいない、と?』

鳳凰の言葉にトゲはなく、ただ甲鉄のように固く冷たかった。だが同時にその隙間から暖かく、苦いものが覗き見えた。

「……」

御堂はそれに反論しない。否、できない。そもそも、どう反論しろと言うのか。御堂は自分の罪を知っている。「武」の本質を知っている。そして、それを心底憎み、許せないことも。そして何より「武」を持ってハッピーエンドを届ける矛盾を知っている。

『辛いのなら、やめてもいいのよ。』

鳳凰は無言の御堂にさらに畳み掛けるように言葉を重ねる。

これで何回目だろうか? ため息を吐きながら御堂は記憶を掘り起こす。が、断念する。とっくの昔に数えるのを諦めたことを思い出したからだ。

そして、御堂はこの問いに対してのみ、揺るぎない答えを持っている。

「やめない、やめられない、やめたくない。この答えは変わらない。」

鳳凰に聞かれるまでもない。あの場所から幾度となく自問したのだ。それでもいつも同じ答えに辿りつく。

『そう、それなら何も言うことはないわ。今はゆっくり休みなさい。またいつ緊急出動スケランブルがかかるか分からないから。』

時刻は午後七時。結局、緊急事態が起きることなく家路につく御堂。もつとも、意識を取り戻して間もないうちに管理局員から尋問まがいの事情聴取を受けたことを考えれば一概に喜べないのだが。「全く、全然信用してないんだな、あいつら。」

その尋問内容に対しての文句は管理局から解放されてからいまだに続いている。

『あなたの嘘が下手すぎるのよ。ほんと、すぐに顔に出るんだから。あんな「僕、知ってるけど喋りませんよ。」みたいな顔を信用するのは聖人が愚か者のどちらかよ。』

鳳凰は完全に呆れている。

「そりゃ、昔から嘘とか知らない振りは苦手なのは自覚しているが、そんなに酷かったのか？」

そして、本人は多少の自覚があるようだが、その自覚が圧倒的に足りていない。

『酷いなんてものじゃなかったわよ。私から見れば、わざとやって取り調べの人間をからかっているように見えただわ。』

その言葉にがっくりと肩を落とす御堂。

『それにしても本当になんでかしらね？ゲームや戦闘時なんかは持っているフリとか持っていないフリ、御堂は結構うまいわよね。それと同じように…』

「それと同じように『何も知らないフリ』ができればいいんだろっが、ぶつちやけ無理。」

落ち込んだ御堂をフォローしようとして言葉を継いだ鳳凰に、しかし、御堂はそんな鳳凰の気遣いなんか知らないといわんばかりに言葉を重ねて全否定。

「俺のフリは基本表情じゃなく、状況でやってるからな。□三味線にしてもまず通用する状況が先にあるから使えるのであって、それ以外はからきしだからな。それに…」

そこから始まる御堂のブラフ講座。まず、ポーカーなどにおけるハッターと戦場におけるブラフテクの違いから始まり延々と続く。

「つまりだ、カウンター呪文のみで相手を止めることは不可能だと、誰かが言っていたが、これはまさにブラフをかけることの意味を分かりやすく説明した名言だと俺は思う。それを踏まえてだ。」

延々と続く。例えて言うなら、ブレーキの壊れた暴走機関車、などではなく、その感じはチョンと宇宙空間に放り出された何かに近い。ひたすら慣性の法則にしたがって進み続けていく。

「で、だ。結局、ブラフを成功させる鍵は相手に疑問を抱かせることだ。まずはそれが取っ掛かり。その後……。」

家にたどり着いてからも続けている。さすがにそろそろ止める必要性を感じた鳳凰がストップをかける。

「御堂、ブラフについて言いたいことがあるのは分かるけど、そろそろ止めなさい。それに今晚、あなたの鬱になる昔話の予定だったんじゃないの?」

「ああ、昔話は延期になった。さすがに墜とされたからな、クロノが連絡を入れてくれた。つーわけでブラフについて語る時間はたっぷりとあるわけだが。」

「それはあの娘達の講義のためにとっておきなさいよ。」
いい加減にして。鳳凰からの言外の一言で御堂はようやく沈黙する。

「それで御堂?」

「ん?何だ?いま報告書いてるところだからなるべく手短に頼む。」
御堂はパソコンとにらめっこをしたまま声だけを返す。

「報告書?一体どれだけ時間がかかっているのよ?確か一時間前に、あと少し」とか言ってなかった?」

確かに、報告書を作り始めてから三十分ほどで「あと少し」の状態だったのだが、それから一時間、全く進んでいなかった。

「それで、何を悩んでるの?」
「闇の書とその主、八神はやてのこと。」

内容そのものはいって苦労せずにとめられるものだ。ヴィー

夕から聞いた話 御堂の場合は鳳凰からの又聞きになる をそのまま書いても十分だろう。では何をそんなに悩むかということ、

『報告するか、否か。』

「それが問題だ。」

シエイクスピアからの引用で問題点を確認する。

もつとも、問題を確認しただけで解決には至らない。

こういうときは「後悔しない方を選びなさい。」とよく言う。

だが、どちらを選んでも後悔する選択が世の中には嫌と言うほど転がっている。

もし、報告するならば世界は救われるだろう。特殊戦技教導隊というのは「外道を持って外道を制す」組織であると同時に「世界のためにかを犠牲にすることを厭わない」組織である。

だが、それは八神はやたとヴォルケンリッターにハッピーエンドを届けることを諦めるということだ。

報告しなければ？報告したときの逆が起こる。つまり「八神はやとのために世界を犠牲にする」と言うことだ。

もちろん、そんなことは認められるはずがない。

悩んでいた御堂を引き戻したのは鳳凰だ。

『御堂、あなたの目標は何？』

唐突に声をかけられた御堂は呆けた声を上げる。

「え？」

『あなたの目標よ。この報告書を書き上げること？世界を護ること？それとも八神はやとを助けること？どれも違うでしょ？』

御堂は虚を衝かれる。

「確かに。全く、俺らしくないな。」

そうだ、一番肝心なことを忘れていた。自らの失態に御堂は苦笑する。

そう。御堂の目標はハッピーエンド。目的は？簡単だ。

闇の書の完成及び、世界の滅亡阻止

あまりにも矛盾した目的。だが、御堂の頭ではこれ以上のよい案が見当たらない。

ならば、この案に全てをかけるか。

御堂は覚悟を決める。何一つ欠けさせない覚悟を。同時に全てを無に帰す覚悟も。

だから、報告書は次の一文で締めくくられた。

「闇の書に対する有益な追加情報は今のところなし。」

特殊戦技教導隊、ひいてはその母体である魔法工学研究局の組織だった介入を避けるために御堂は報告書に嘘を書く。目的のためには特殊戦技教導隊の介入はまだ早い。

そう、目標はハッピーエンド、目的は闇の書の完成と世界の滅亡阻止、なのだから。

「武」を以ってハッピーエンドを届ける矛盾を知っている。それでも、ハッピーエンドを届ける努力は怠らない。

鳳御堂は自分の幸福を実感していたし、それが明日も明後日も一週間後も一ヶ月後も一年後も十年後も、いつまでも続くと信じていた。

一般的な家庭から考えれば少し裕福な暮らし。両親共に健在で弟一人に妹一人の長男。騒がしく、賑やかで幸せな暮らし。

何よりの幸福はお隣さんの存在だった。彼女は歳が一つ下の幼馴染。生意気だけど慕ってくれる、世界で一番大事な人。なお、悪友達に言わせれば彼女と俺の仲は「恋人」だそうだ。

もっとも、御堂と彼女は「まだ」、そうではなかった。少なくとも御堂にとって、彼女は「まだ」恋人ではなかった。ただ、もう少し先、彼女に相応しい人間になれば告白しようと思っていた。

そう言う意味での「まだ」だった。告白の台詞まで用意し、寝る前のイメージトレーニングも欠かさなかった。

「どつしよつもなく、お前のことが好きなんだ。俺は死ぬまでお前の、華蓮かれんの隣にいたい。だからさ、俺と、今までのように幼馴染じやなく、恋人として付き合ってくれないか。」

会話の最中に流れをぶった切るパターンからさりげなく話を持っていくパターンまで、実に50を超える状況から告白の台詞に続けられるように（想像の中で）練習した。

でも、この練習が役に立つ機会は訪れなかった。

だって、彼女は、墨目華蓮すみめは鳳御堂が したのだから。

鳳御堂が鳳凰と出会ってから、一ヶ月。その間に彼の生活は少々変わった。勉強や遊びのほかにもう一つ、「ご近所の奇妙なトラブルの解決」が加わった。具体的には警察が動いてくれなかったり、裁判に証拠として提出しても絶対に認められない、幽霊や魔法やらの俗に言うオカルト関連のトラブルだった。

だが、御堂は嫌々やっているわけではなかった。少なくとも、誰かに頼まれてとか、強要されてやってはいない。自分の意思でそれらの事件を解決していた。もっとも、それは正義感とかそう言ったものではなかった。

「だって、鬱陶しいだろ。」

気になった鳳凰が一度御堂に問いかけたときの答えがこれだった。「それに、ちよつとカッコいいじゃないか、こういうの。もっとも、あんまり頻繁すぎるのは考え物だが。」

鳳凰と結縁してから、最低でも一日2回、多いときでは5回もその手のことに遭遇していればこのボヤキは正当なものだろう。

おまけに鳳凰のことを完全に内緒にしているため、そろそろ誤魔化す口実のストックがなくなりつつある。と言うか、華蓮は完全に怪しんでいる。だが、御堂は頑なに口を閉ざしていた。とある事件の影響で劔冑は人々から忌み嫌われる武具であり、仕手だけでなく周りの人間も何らかの被害を受ける可能性があった。そんなことに

好きな女性を巻き込めるはずがなかった。

そして、それが裏目に出ることなど、そのときの御堂には分かるはずがなかった。

「ふう、ようやく原因を突き止めた。日本語が分かるのなら耳をカッポ時つてよく聞け。二度と悪さしないのなら見逃してやる。もし、その気があるのなら早々に立ち去れ。」

その日も御堂は怪異と対峙していた。対峙しているのは告白スポットとして有名な公園、そのちよつと奥に行つた所にある森の中だ。少し奥にあるおかげで人の気配はない。

今回の異形は鳶だった。ただ、本来植物であるはずのそれは互いに絡み合い、足がなく直接地面から生えている点、顔が鳥のように鋭角的である点を除けば、人の姿といえないこともなかった。もっともそれが人と言うなら、ギネス記録が一気に2メートルほど更新されてしまうのだが。そして、人間で言えば腕にあたる部分は明確な敵意を持つてまつすぐに御堂に伸びる。

もちろん黙つて食らうわけにはいかない御堂は舌打ちと共に回避する。

『で、説得は失敗したけど、どうするの？』

「装甲しかないだろう。」

こうなると、平和的解決など不可能。こういうときの御堂の判断は早い。一旦、鳶の異形と距離をとつて静止。その後、キーホルダーサイズの鳳凰を真上に放り上げ、体の力を適度に抜く。鳳凰が顔の高さまで落ちてきて、宙で静止するのを確認すると誓約を唱える。「我等に翔け得ぬ空は無く」

『我等に駆け得ぬ大地も無い』

「『装甲』」

次の瞬間には一騎の白銀の武者が戦場に現れた。

それに対して、尚、攻撃の意思を見せる鳶の異形。しかし、今度その一撃は「やらなければ、やられる。」と言つた悲壮感漂う攻

撃だった。だが、その攻撃は御堂に届かない。

キャスト インシネレート
『詠唱、火葬。』

抜刀と同時に火炎が走り、蔦の根元に直撃、そのままポツキリと焼き折れてしまう。もちろん根元から折られバランスを崩した攻撃が当たるわけも無く、御堂は無傷。

そのまま倒れた蔦は一瞬で火炎に覆われ、灰になり舞っていく。

「よし、終わり。」

それを確認した御堂は除装しようとして、

『御堂！』

鳳凰の警告虚しく殴られる。

「新手か？」

『違う、さっきのヤツ。』

言われて振り返ると、根っこから新しい異形が生えている。

「おい、ちよつと待て、再生不可の効果があつたはずだぞ。どうなってるんだ?!」

御堂が悲鳴を上げる。

『ええ、確かにあの一撃で死んだ。再生なんてしていない。』

「じゃあ、なんで？」

『蘇生、だと思つたよ。』

「対処法は？」

『ちよつとだけ待って。すぐに考えるから。それまではなるべく熱量と魔力の消費を抑えて対処して。』

言つは易しの典型だが、鳳凰のほうが実戦経験豊富なのだ。それに逆らうほど御堂は馬鹿ではなかった。言われたとおりに、熱量、魔力共に絞り、最低限の消費で防いでいく。

だが、長くは続かない。最低限の力ということは、余裕が無いとこのと同義であつた。少しの読み間違いで致命傷となる。そして、それが起きてしまった。

御堂はフェイントにかかりバランスを崩す。その後、本命かつ致命的な一撃が完璧なタイミングで御堂を襲つた。

「間に合った。いくわよ、御堂。詠唱、天才のひらめき（ストローク・オブ・ジーニアス）。」

その瞬間、御堂の知覚できる時間が限りなく延長されると共に、大量の知識と情報が御堂に流れ込む。

「観えた。」

それは勘でもなく感でもない、観と呼ばれるものだった。御堂は解答を見つけた。

「御堂！！」

だがその解答は崩れ去る。一人の少女の叫びによって。

墨目華蓮は物心ついたときから鳳御堂と一緒にいた。それぞれの両親が大学時代からの友人だったこともあり、家族ぐるみの付き合いであったせいだろう。

長い間、同じ刻を過ごしているうちに、いつの間に隣の幼馴染が気になる異性にクラスチェンジしたのかは分からない。

まるで出来の悪い少女マンガがギャルゲーだ、と華蓮は思う。だが、気づいたらそうなっていて、気になってしまったものは仕方なく、それからは御堂のことを見ていることが多くなった。

だから、彼女は最近の御堂の変化にもちろん気づいていた。何か隠し事をしていることに気づいていた。

何度も問い詰めたものの御堂は頑なに口を割らない。これは華蓮の知る限り珍しいことだった。

こういうときの御堂は基本的にすぐに口を割る。なぜか？御堂は自分が嘘をつくのが苦手であることを自覚しているからだ。下手に誤魔化そうとしてもややこしくなるのを知っている。だから、基本的には気づかれたらすぐに吐くのが普段の御堂のはずだ。一部、感情的と言つか、子供っぽいと言つかそんなところがある御堂だが、基本的には合理を尊び無駄を嫌う。だから、「どうせばれるなら、今ばらしたほうが無駄がなくていい。」と言つのが普段の御堂だ。

それが今回に限り、口を閉ざしている。ならば、華蓮に残された手段はほぼ二つに絞られる。徹底的に調べて証拠を突きつけるか、諦めるかのどちらかだ。おあつらえ向きに御堂はたつた今、怪しい言い訳をして席をはずした。デートの最中にも関わらず、しかも、これから告白でもしようかと言う。ここはこの辺で告白スポットとして有名だ。いい雰囲気の時だ。

華蓮は隠し事をされる事には一定の理解がある。誰にだって秘密はあるし、そうすることが必要な時があることもわかっている。だが、それが付き合いたいと想う男性ひとなら例外だ。

だから、墨目華蓮は強硬手段で御堂の隠し事を暴くことを選択した。

墨目華蓮にとって鳳御堂を尾行することは難しくなかった。男女の体力差があるためさすがにぴったり追いかけるわけにはいかなかったが、地面の雑草を踏み倒した跡をたどれば容易に追いかけられた。

そして目撃する。もう、残っていない筈の白銀の武者が一騎、植物のような異形と対峙しているのを。

そして、耳にする。武者の悲鳴を。

「おい、ちよつと待て、再生不可の効果があつたはずだぞ。どうなってるんだ?!」

それは、間違いなく御堂の声だった。

華蓮はもちろんそれ 対峙している武者が御堂である事実 を正確に理解していた。

その上で声を出せなかった。いま、御堂はギリギリの綱渡りで戦っていることも同時に理解してしまったからだ。ここで、声を出せば御堂が綱から落ちることを分かってしまったから。

しかし、それは関係なかった。綱渡りなど永遠に続けられるものではないのだ。フェイントに引っかけり致命的な隙を晒す武者に、それこそ致命的な一打が振り下ろされる。

「御堂！！」

華蓮は叫んでいた。それどころか飛び出してもいた。何も出来ないはわかっていた。それどころか足を引っ張ることになることも分かっていた。だが、それらの理性を恐怖が上回った。そう、何もせずに好きな男性ひとが死ぬのを見る事は何よりも怖かった。

「御堂！！」

鳳御堂は驚愕する。だが、驚いたのは御堂だけではなかったらしい。突然のことに鳶の異形も同様に驚き、そのおかげで攻撃も逸れた。

だが、それ以上の問題が発生した。異形の敵意が、殺意が、華蓮に向けられた。

そう、華蓮の行動は御堂の窮地を救いはした。だが、それは窮地に陥った者が入れ替わっただけであった。

御堂は理解できなかった。なぜ、彼女がここにいて、あまつさえ、殺されかけているのかを理解できないでいる。

だが、御堂は動く。華蓮を襲う異形に対する怒りと憎悪に駆られて翔ける。未だに状況は理解できていない。それでも、護るための殺意 正しき怒りと憎悪 に従い、なけなしの熱量を振り絞り、現状に対処するために翔ける。

合当理を噴かしながら、納刀。打開策を検索する。

一秒を百分割、その百分の一を更に千分割し、その砂時計の一粒より小さい塵のような一個の時間ごとに大脳を全周する。

攫うのは記憶の一片一片。

争い戦った敵の一人一人。

レコード・オブ・マイ・バトル

俺達の戦闘記録

チェック チェック チェック

確認、確認、確認。

それでも解決策が見当たらない。

(当たり前だよな。)

解決策が見つからない。なぜなら、誰かを護るための戦いなど今までに経験してこなかったのだから。

御堂は解決策が見つからない現状を認める。だが、今の御堂は戦闘者だ。現状打開の諸端としてそう認める。だからこそ、過去から解決策を求めることを放棄する。

「見つからなければ創るまで、だ。」
なければ作れ。ものづくりの原点、人の進歩の原典が其処にある。

現状を打開できる方策を一から構築する。却下だ。時間、熱量共に圧倒的に足りない。

ならば、今あるものの組み合わせで構築する。基本方針は確定された。

次に、方向性を定める。

華蓮を安全な場所に退避後、異形を葬る。却下だ。華蓮を退避させることは可能だが、その後の熱量不足は勝利の可能性を極めて低い程度に落とす。

異形の華蓮への攻撃を防ぎ、反す刀で異形を屠る。却下だ。理由は前記に同じ。

ならば、異形の攻撃が華蓮に届く前に異形を殺すのが最善手。誰が言ったかは知らないが、「攻撃は最大の防御」というのは一面の真実だ。これで方向性も決定した。

あとは、これに沿って手段を構築するだけである。

「コンピネーション、エンディング
陰儀連携、蒐窮。」

今まで試したことのない陰儀の連続使用、それをこの土壇場で行う。何しろ初めてのことだ。本来ならじっくりと保険をかけながら進めたいところだが、そんな余裕はない。かといって、焦っても失敗する。巧遅では間に合わない。拙速では失敗する。故にここで必要なのは巧速（こつそく）の技術。

『キャスト、アイス
詠唱、氷』

まずは相手の攻撃を一瞬でもいい、遅らせる。そのための氷結系行動阻害呪法。強烈な冷気が敵の腕を絡めとる。しかし、その冷気も目的の余波に過ぎない。本当の目的は刀身及び鞘の冷却。

「詠唱、稲妻。」
キャスト ライトニング・ボルト

ついで唱えるのは雷の攻撃呪法。ただし、これを直接叩き込んでも蘇生される。だから、御堂はローレンツ力が抜刀速度を加速させるような電気回路を鞘と刀身に構築し、冷却され電気抵抗が格段に小さくなったそれに雷を通す。

これにて下準備は完了。あとは仕上げにかかるだけだ。

「キャスト デーモンファイア
詠唱、悪魔火。」

熱量を魔力に変換しながら、今回の切り札たる呪法を太刀に付与する。

そして、大電流に辛うじて耐えている太刀が不気味な唸りをあげる中、一連の呪法が成立する。

「食らいやがれ！」

御堂の叫びに呼応するかのように鳳凰の甲鉄が銀に光る。それに気づいた鳳凰が悲鳴を上げる。

「止まって！御堂！！」

だが、御堂は止まらない。すでに詠唱してしまっている。そして、カウンターズベル対抗呪文を唱える魔力も熱量も残っていない（もともと、全力全開の余力を残さない悪魔火は打ち消せないのだが）。

だから、いくら制止されても御堂は止める術すべを持たなかったし、止めるつもりもなかった。ここで止めたら、彼女が肉塊すくに変わることを理解していた。

だから、御堂は刀を抜く。

「電磁抜刀。」
レールガン

それは、ローレンツ力によって加速された抜刀術。極限の磁界制御と電流制御の賜物。まさしく巧速けんの一刀。

閃光が異形を横切ると同時に戦闘は終わっていた。

異形の姿はどこにもない。当たり前だ。燃え尽きるより早く、灰

になるよりも早く、質量保存の法則すら無視して、異形は焼滅したのだから。

そして、其処には何も残っていなかった。生い茂る木々も地面の雑草も何一つ。ただ二つ、一騎の武者と一人の女性を除いては。

「御堂…?」

華蓮が呆けたように口を開く。

「…華蓮、無事か?」

それに対して御堂は華蓮の安否を尋ねる。

「…うん。怪我もないし大丈夫。」

「よかった。」

それを聞いて御堂は安堵する。同時に体が思い出したように疲労と痛みを訴える。特に右腕が酷い。もつとも当然と言えば当然の結果だ。電磁抜刀の技法は「抜刀」と呼んではいるがその本質は「刀を抜く」のではなく「刀を打ち出す」と形容すべき技である。高速で打ち出された刃を制御する右腕にはかなりの負担がかかる。

だが、それでも御堂は誇らしい気持ちでいっぱいだった。愛する女性を自分の力で護れたのだ。これぞ男子の本懐というものだ。

御堂が心地よい疲労と痛みに浸っていると、ようやく現状に追いついてきた華蓮が声を発する。

「それより、御堂…。」

「華蓮、聞きたいことがあるのは分かるし、俺も伝えたいことがあるんだが、少し休ませてくれ。」

熱量を急激に消費した直後特有の眠気が御堂を襲う。だが、御堂の意思に反してその体は一向に装甲を解こうとしない。それどころか、太刀を華蓮に突きつけている。踏み込みと同時に太刀を突き出せば確実に華蓮を殺害できる。

「御堂、ごめんなさい。」

鳳凰の声が聞こえる。悔しくて、哀しくてそんな声。

その声が引き金だったのか、御堂の体は踏み込みと同時に太刀を

突き出す。すなわち、墨目華蓮を殺害する。

「「え？」」

二人の疑問が重なる。二人とも目の前の光景に対する疑問だった。理解できなかった。否、理解したくなかった。自分達に起きたことを否定したくて、その光景を疑う。否定するための理屈をこねて、証拠を探す。だが、疑えば疑うほどそれは現実であることを主張する。

そんな状況から先に復帰したのは意外にも非日常に片足突っ込んでいる御堂ではなく華蓮だった。

「えっと、…あの劔冑さん？」

『鳳凰よ。』

華蓮は致命傷のはずだが質問を重ねる。しかも御堂ではなく鳳凰に対してだ。

「鳳凰は勢州千子の系統なの？」

勢州千子。劔冑鍛冶の中でもっとも悪名高い一派。南北朝の「争乱」を「地獄」として演出した妖甲「村正」を打ったことが要因だ。

『違うけれど、関係ないとは言えないわね。』

苦々しい声で答える鳳凰。

「どういうことだよ、おい。」

搾り出すように質問する御堂。だが、御堂は問いかけながらもその答えをある程度予想できていた。

中学校のときの総合学習。何度目になるか分からない華蓮との共同作業。それがあつたから華蓮も勢州千子の名前が出てきたのだから。

南北朝の地獄を演出した悪辣なる舞台装置、妖甲「村正」。出自は前記に触れた通り勢州千子の作。御堂と華蓮の総合学習のテーマでもあつたそれは二人をもつてしてこう言わせるものであつた。

「こんな胸糞悪いもの調べるんじゃないか。」

なにが、胸糞悪かったか？それは村正が妖甲と呼ばれる所以、村

正の備える呪い。その呪いは

『善悪相殺。私は昔、村正と戦ったときにその呪いを刻まれた。』
聞きたくなかった答え。だが、半ば予想していた答えが鳳凰によ
つて紡がれる。

善悪相殺。善と悪を共に殺す。

そう、「共に殺す」。御堂と華蓮が村正について調べていたとき
引つかかった点がこれだった。

なぜ、善悪「相殺」なのか？これなら善悪「共殺」のほうがピツ
タリだろう。当時はそう思っていた。

だが、今の御堂は善悪「相殺」に納得していた。

悪しき者を殺したならば善き者も殺す。自らの善を自らの悪で相
殺する。

だが、御堂は現状には納得できない。いま、華蓮に刃を突き立て
ている現状に納得できない。

理論的にはこの状況を現実として認めざるを得ない。実際、頭は
そう認識している。だが、心のほうは納得しない。認められない。
否認ネグイトしたい。だが、もう解決しているのだから、打ち消しじやどう
にも出来ない。そんなどうしようもない感情が御堂の顔を歪める。

「ねえ、御堂」

だが、呼びかけてきた華蓮は微笑んでいた。胸に刃が突き刺さっ
ている状態で微笑んでいた。まるで、待ち望んでいた何かをようや
く手に入れたような微笑だった。だが、同時にちよっぴり寂しさが
混じった微笑みでもあった。栄転で誇らしいことなんだけど家族と
離れることになったときの表情と言うのが一番近いだろうか。

「ありがとう。」

そんな表情から紡ぎ出されたのは感謝の言葉。刺されている人間
が刺してる人間に対して言う言葉では決してないはずの言葉。

「なんだよ、それ。」

もちろん御堂は困惑する。罵倒や恨み節こそが相応しいはずなの
に聞こえてくるのは感謝の言葉。だから、わけが分からない。

華蓮は長年の経験で御堂の困惑を察知すると、言葉をを繋ぐ。

「知ってる？私、結構モテモテなんだよ。」

だが、つなげられた言葉は先ほどの感謝の言葉より支離滅裂、不可解な自慢話。そして、御堂はその流れに乗ることを選択する。

「知ってる。誰かがお前に気があるって噂を聞くだけで気が気じゃなかったよ。」

「私が誰かと引つ付くとも思ってた？」

華蓮は悪戯っぽく聞いてくる。

「思いたくなかった、が答えかな。」

御堂はそのときの気持ちを思い出しながら答えを選ぶ。

「理由を訊いてもいい？」

御堂は後悔する、この流れに乗ってしまったことを。

「言わなきゃわからないか。」

絶対わかってて訊いてるだろう、華蓮のヤツ。それでも敢えて訊いてくるのだから、言わせたいのだろう。

そう悟り、御堂は覚悟を決める。

この手のやり取りで御堂は華蓮に勝てた試しがないのだから、今までは。

「うっん、分かってる。善悪相殺、この呪いこそが何よりの証拠じゃない。こんな過激で嬉しい告白は初めて。だから、『ありがとう』」

華蓮はそう言って御堂に飛びつきりの笑顔を見せる。御堂はその笑顔に魅せられる。

「でも、ごめんね。わたし、あなたと付き合えない。」

華蓮は笑顔を少し優しくして、御堂に告げる。

「そりゃ、こんなことされりゃ、嫌いになるわな。」

御堂は自分を嗤いながら 当然だと思いながら、それでも失恋というものが案外と堪えるものだと思い知らされた。

「勘違いしないでよ、御堂。こんなことで嫌いになるわけじゃない。だって、ずっとずっと大好きだったんだから。今までも、こ

の時も。」

華蓮は訴えながらだんだん表情が崩れていく。笑顔から、泣き顔へ。

「だけど、ううん。だから付き合えない。」

それでも懸命に笑顔を作ろうとする。涙でぐしゃぐしゃになった顔で文字通り「命を懸けて」笑う。

「だって、ただの幼馴染の関係なら、これで終わりでもいいと思えるから。それぐらいあなたといるいろいろなことをやっ^{ハッピーエンド}たし、やり残したこともほとんどないから。だからね、概ね幸せな結末だと思わない？

でもね、いま、ここで告白にオーケーしたら、恋人になっちゃったら、やり残したことしかないじゃない。そんなんじゃ私、笑って終われないよ。」

華蓮は涙声で、それでも精一杯に笑って魅せる。

「じゃあ、なんで、そんなに、無理して笑ってたんだ。そんなんで、ハッピーエンドなんていわれても納得できねえよ。」

だから、御堂は反論する。弱弱しく、搾り出すように、それでもはつきりと相手に聞こえるように。

「やり残したことが”ほとんど”ないって言ったよな。まだ、残ってたんだろ。」

「うん、まだ残ってる。あと一つだけ。『あなたと恋人になりたい』って願いが一つだけ。でもそれは成就したらいけないから。叶ったら、私笑えないもの。」

泣きそうな笑顔で華蓮は御堂を諭す。

「『変わらない物語は、死んだ物語だ。』」

いい言葉でしょ。だから、私も笑っていたいの。笑って終われば私はそこから変わらずに済むから。ずっと笑っていられるから。

だからね、御堂。これでいいんだよ。」

華蓮は言いたいことを言い切って目を閉じ、倒れる。もちろん笑顔のまま。

御堂は動けない。華蓮を刺した姿勢で固まっている。だが、華蓮が倒れたことで刀が華蓮から抜ける。その瞬間を待っていたかのよう
うに、周りが紅く染まり始める。劔冑も刃の視界も何もかも。

少しの現実逃避のあとにそれが血であることを認識した御堂は叫
びにならない叫びを上げた。

この日、御堂は引き換えし不能地点を渡った。非日常への境界線
を完全に越えた。御堂が次にこの境界線を越えるときがあるとする
ば、それは全てが終わったときになるはずだ。

第六話「戦える理由、戦う理由」（後書き）

あと一話使って御堂の過去編にケリをつける予定。あくまでも予定。大事なことなので二回言いましたよ。

さて、少しネタバレというか、解説つばいのをつけようかと思いません。

鳶の異形

今回の敵役。モデルは「復讐鳶」。ちなみにスタンダード（2010年11月現在）でGLが嫌いなクリーチャーNo.2。黒いデツキじゃなくてもサイドに黒力線4枚積みたいぐらい嫌い。

基本的にGLはアンチ緑ですので、これからも御堂と鳳凰には緑のクリーチャーをひたすら殺していったら欲しいと考えています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6925i/>

魔法少女リリカルなのはA's 嵐に挑む翼

2010年11月23日18時06分発行